

「2人が暮らすための方法について」

<序章 2人で暮らす家>

地方都市の中古の2LDKのマンション。自宅としてこの間取りを求めるなら世帯構成が夫婦と保育園児で計3人というのは無難な線だといえる。

安田篤人が世帯主として住所を置く204号室の住人は、数ヶ月前に確かに1人減となった。それは彼自身も認識している。しかし、さらに1人減となっていたという知らせは何の前触れもなくもたらされた。

目覚めたとき、篤人は自分がいつの間にかリビングのソファで眠っていたのだと認識するのに少し時間がかかった。不恰好な姿勢で横になっていたからか、あまり寝覚めはよくない。体を起こし、だらしなく開いたカーテンの隙間に目をやれば夕闇がのぞいている。電気もつけずに左右の首筋を伸ばしつつトイレに向かい、用を足してリビングに戻ると薄暗い部屋の中で赤い光が目についた。

パソコンデスクの横にある、ほこりをかぶってほとんど使っていない固定電話。そこに留守電の着信があったことを示すランプが点滅していたのだ。実家からでも連絡があったのかと思いつつそのランプを兼ねた再生ボタンを押すと、聞き覚えのない女性の声が流れてきた。

「こちらは県東部児童相談所です、安田様のお宅でしょうか、お知らせしたいことがありますので000-xxx-xxxxxまで至急ご連絡をお願いします」

児童相談所と名乗る電話に最初は間違い電話ではないかと思ったが、この番号で「安田」とははっきり認識している様子だった。

加えて気になることがあった。もっぱら携帯電話を連絡先としているので、この固定電話の番号は最近では全くと言っていいほど書類などには書いていないのだ。なのにどこから伝わったのか、そんな疑問も抱きつつ、立ったまま少し身をかがめてリダイヤルボタンを押した。受話器を耳に当てながらデスクの椅子に腰掛け、呼び出し音に耳をすます。

「はい、県東部児童相談所です」

2コールで女性が出た。

「安田と申します。留守番電話に着信があったので電話しました、こういったご用件でしょうか」

「少々お待ちください、お電話を差し上げた者に代わります」

保留音が流れている間、振り返って壁の時計を見た。18時を回っている。しまったという思いがよぎったのと同時にさっきとは別の声が耳に飛び込んできた。

「お待たせしました、お電話を差し上げた佐伯と申します」

「安田です」

「安田篤人様でしょうか」

「はい」

「お電話ありがとうございます、実は、お子様の豊くんのことでお伝えしたいことがあります」

「はい、ああ、でも今から保育園に迎えに行かなくちゃならないんで、できれば手短にお願ひできますか？」

保育園のお迎えの時間は18時なのだ、遅れるなら遅れるで園に連絡をしなくてはならない。また時計に目をやりつつ、あせりから口調が少し早口になる。

少しの沈黙をはさみ、佐伯と名乗った女性は迷いなく言い切った。

「お迎えに行っていたら必要はありません」

「はい！？ ちょっと、それはどういうことですか？」

思いがけない通告に声が上ずる。しかし相手はその反応を気にも留めていないように続ける。

「豊くんは、私ども東部児童相談所で一時的に保護させていただいています」

「保護？」

(何が起きているんだ、豊は今保育園にいるはずじゃないのか?)

篤人にはその言葉の意味するところが瞬時には理解できなかった。浮かぶ疑問を置き去りにしたまま相手の言葉は続く。

「はい、電話では十分に伝わらないこともあるかと思われ、なのでこちらにお越しいただいたうえで説明したいのですが、ご都合はいかがでしょう」

「……豊に何かあったんですが、事故にでもあったんですか？」

「事故というわけではありません、今は安全な場所にいますし、元気な様子です」

「じゃあ、何で保護なんてしてるんですか？」

「そのことも含めてご説明しますので、まずはお越しいただけませんか？」

「そんな……」

(事故でもないのになぜ保護なんてされてるんだ。それにろくな説明もせず、とりあえず来いというのはどういう了見だ)

いろいろと問い質したいことが頭の中に溢れるが、起き抜けの思考では何からどう話すべきかうまく整理ができない。ささくれた気持ちを落ち着かせてからでないと、不用意な言葉を口走ってしまいかねないと理性が危険を訴える。落ち着け、と自分に言い聞かせてから、なるべく穏やかな言葉を選んで喉から絞り出す。

「わかりました、どこに行けばいいんですか」
「東部児童相談所です。県の東部総合事務所、中央郵便局の南側の建物をご存知でしょうか？」

自分の行動範囲にはない、初めて聞く建物だと思いつつメモを取る。

「知りませんが、調べて行きますよ、あ、ただちょっと」

「はい？」

「すぐには無理です、今日行けたら行きますよ」

「え、あの……安田さん？」

言葉を継ごうとした佐伯に対し、これ以上のやりとりは無用とばかりに篤人は電話を切った。

ため息をつくとも目の前がチカチカし、こめかみを中心に脈打つような頭痛を感じた。受話器を放した腕をだらりと下ろし、椅子からソファへ倒れこむように乗り移る。受話器を握っていた左手から心臓にかけ、しびれたような強張りを感じたまま体を横たえる。何かをするべきだとは思いつつも、動かない体は小刻みに震えている。

部屋に響くのは電源を入れっ放しのパソコンのうなり声と、先ほどまで心を追い立てていた時計の秒針の音だけ。70平米の安田家、畳に換算して22畳の広さは不相应だと揶揄するように、空虚さだけがその空間を埋め尽くしていた。

< 第 1 章 保護する大人、保護される子ども >

安田家をめぐっての児童相談所における急展開の始まり、それは篤人が佐伯と初めて言葉を交わした 18 時から 8 時間ほど前に遡る。事の起こりはその日の 10 時ごろ、豊の通う保育園の園長による切迫した口調の報告だった。

「年長クラスの安田豊くんという子の後頭部に大きな線状のあざがあります、これは身体的虐待とみるべきでしょうか？」

電話を受けたのは東部児童相談所虐待対応班の一番の若手男性職員である三島だった。虐待通報は何度対応しても緊張する。それは経験した誰に聞いても、程度の差こそあれ異論のないところだろう。しかし、このような事態を経験したことがない通報者はこちら以上に緊張している。勤めて冷静に、相手をクールダウンさせつつ、必要なことをもらさず聞き取ることが求められる場面だ。

「まずはあざの写真を撮っておいてください、それからそのほかの部分にあざなどがないかを確認してくださいませんか？」

対応マニュアルの通りいくつかの質問をし、ある程度の情報を得た時点で「早急に対応を検討して折り返し連絡させていただきます」と告げて電話を切る。

「どんな感じ？」

電話でのやりとりをすぐ横でうかがっていた先輩職員の佐伯が、手元の走り書きされた通告受付票を覗き込みながら尋ねてきた。児童相談所勤務 10 年目のベテラン女性職員だ。「年長児の身体的虐待の疑いですが、あざの発見は今回が初めてですが、最近気になっていた家庭で、しばらく休みが続いていて久々の登園でけっこう目立つところにできてるってことでした。児童自身は痛がる様子はないようです」

三島が緊張の余韻を残した声で手短かに報告すると、佐伯も同じトーンの声で情報を上司へパスする。

「わかった。班長、虐待通報です、15 分後に緊急受理会議いいですか！」

「あいよ、所長に一報入れてくる」

班長と呼ばれた中年の男性が立ち上がり、事務所奥の所長という肩書きのネームプレートの置かれたデスクへ早足で歩いてゆく。

「三島は相談履歴がないか確認して、あたしは市の対応記録をあたるから」

言うが早い佐伯は短縮ダイヤルで児童の住所地の市へ連絡を入れている。三島も業務システムパソコンのキーを叩き、以前にここで対応した家庭でないかの確認を始める。

きっかり 15 分後、所内の会議テーブルに児童相談所長・田澤、虐待対応班長・河原、班員の佐伯と三島、児童の住所地区担当ケースワーカー平田が揃った。

テーブルに乗せられた議論の材料は次のとおり。

- ・保育園によれば、あざの大きさは約 5 センチ、位置は後頭部で耳の頂点あたりの高さ。児童が登園後に「かゆい」と言って頭をかいていたため、担任が様子を見たところで見つけた。これまでに目立った傷をつけてきたことはない。送ってきた父によるケガについての言及はなし。

- ・先月くらいから休むことが多くなり、今月は今日が初めての登園。この間土日を含んで 8 日ぶり。休みの理由は体調不良とのことだった。今日の体調は問題ないように見えるが登園時の服装はこのところあまりきれいなものではない。

- ・児童相談所で取り扱うのは初めての家庭。

- ・市の児童課では 3 年前に関わりがあった、3 歳児検診が未受診のため保健師が家庭訪問し、母の孤立化や育児疲れなどによる養育上の問題があったため最終的に保育園入園を支援し、見守りをしてきた。その後は大きな問題の記録なし。

- ・家族構成は夫婦と今回通報対象となった児童の 3 人世帯。近隣に親族はいない。

ひととおりの状況説明が済むと資料に目を落としつつ河原が三島に尋ねた。

「今までの保育園でのこの家庭への評価はどんなものなの？」

「園長はこの 4 月に異動したばかりということで、前任者からの引継ぎ内容で親子ともそれほど気になる家庭というわけではないということでした。それだけに今回は急に大きなあざを見つけたことで心配の度合いは高い印象を受けます」

先ほどの電話の口調も張り詰めたものだったと付け加えた。それに佐伯が続ける。

「休みがちだったところに大きなあざをつけてきたのが確かに心配になるところですね、明日確実に登園するかわからない状態っていうのが……」

「3 年前の状況が再発したってこともあるかな、何かのきっかけでまた母親が養育に行き詰ってるかもしれないねえ」

河原はそこまで言って上座の田澤に伺いを立てるように顔を向ける。

「まずは早急に詳細な情報収集、ですね」

「そうだね、見えない部分がまだ多い」

会議メンバーで一番経験年数が長い河原の示した方針に田澤が頷く。田澤はこの組織のトップであるが、この春に他部署から異動してきたばかりで児童相談所での勤務経験はないため、自ずと河原が具体的な指示を出すことになる。

「児童については直接保育園であざの状態を確認、続けて園の職員による保護者への対応方針を打ち合わせる。最終的な緊急度を判断するための詳細な情報を関係先から平行して

収集」

保育園へは佐伯と三島で調査に向かう、平田ほか所内のスタッフで市の児童課と保健部門から情報収集、河原は所で情報を集積して分析、現地調査の結果と合わせて方針決定を昼過ぎまでに行うことが確認された。

「では、よろしく」

田澤の声が響き、会議は終了。それぞれが慌しく動き出す。

「一時保護には微妙なケースですかねえ」

保育園に向かう車の中で三島がつぶやいた。これから集める情報で危険度・緊急度が高いと判断されれば、児童を一時的に家庭から離し、児童相談所が保護する事態になることを懸念しているような口調だ。その言葉の裏に秘められた思いを汲み取りつつ、佐伯が答える。

「ケガの状態と家庭状況によりけりってところね、でも、最近の所長は安全策を取る方針だからその心積もりはしておいたほうがいいと思うわよ」

「一時保護所、今けっこうぎゅうぎゅうですよ」

確かに、佐伯たちが保護した児童の生活場所となる一時保護所は、いつでも空きは少ない、最近はその傾向がさらに顕著だ。一時保護と言いながら結構な期間をそこで過ごすことになる児童は多く、なかなか余裕を持った運営というのは望めない状況にある。

「ま、そのときは別のところを考えることになるわね。って言うかうちらの都合で保護をためらうなんてことをしたらそれこそ後でえらいことになりかねないわよ」

「わかってますけどねえ……」

あまりエネルギーを感じないこの三島の嘆き節を批判することはできない。

児童相談所はいつだって過重労働気味、いや、むしろ過酷と言ってもいいくらいだ。国における財務省がいい例であるように、一般的に残業時間が最高レベルに達すると言われるのは組織全体の予算を担う財政部門、しかしこの県においてはそのさらに上に行くのが児童相談所だ。長時間労働だけならまだしも、業務の困難性や疲弊度合いがその上に加わっており、厚生労働分野の部署としてあるまじき労働環境にあることは、この界限では広く知られていることである。

先ほどの会議メンバーでは河原が11年目、佐伯は10年目のベテランだが、三島と平田はまだ2年目である。全体的に中堅職員が手薄な組織なので、2年目というまだまだ修行中といえる立場であっても最前線に出てもらえない。1年目でつぶれて異動や休職となる者がごろごろいる状態では、

そこへ持ってきて、一時保護にかかわることになると職員の負担はさらに増す。できることなら保護をしなければならぬ事態が起きないに越したことはない、それだけ児童の安全が保たれているということになるし、副次的に職員の心と身体のコンディション維持、そのほかの山積みの業務への注力が可能になるのだから。

カーナビの指示に従って大通りに出た。これから先はしばらく道を気にする心配はないだろう、そう思われるタイミングで運転する三島に声をかけた。

「どう、ストレスたまってない？」

「なんですか？ 急に」

「あたしはたまってるのよ」

「先週の土日の出勤のからみですか？ 施設を脱走した中学生を探してたっていう」

「それもあるけど、この9年の累積債務っていうほうが大きいかもね」

先週末は妹夫婦が実家に帰省していたので、4歳と2歳の姪っ子甥っ子と遊んで癒される予定だったのだ。しかし、土曜の朝一で飛び込んできた件の事件の対応に追われ、なんとか本人を発見した後は施設に戻らざるを得ないことや、どうしたら施設で今後生活していけるのかなどを延々と話をし、なんとか納得させたところで疲れはピークに達した。渡すはずだった2人の誕生日プレゼントを持っていく余裕すら無く日曜の21時という子どものような時刻に眠りに落ちたのだった。

土日祝日には事件が起きないなんていう暦どおりの労働環境に児童相談所はない。携帯電話の着信音に心臓がドキリとしていた最初の1・2年が懐かしく思えるくらい、呼び出しには機敏な動作とどっさりとした気持ちで応答するようになってもう長い年月が過ぎていく。

「長いですね、佐伯さん」

「望んでるわけじゃ決してないのよ、異動希望は出してるんだから。後に続いてくれる人さえいれば……」

後輩に先を越されて「卒業」できず、今年も異動がないと知らされたとき、どうやって一年を乗り切るのか、はたして乗り切れるのかという思考が浮かぶ。何かを「やる」というよりも「やりすごす」という感覚で日々を過ごしてきたのがここ数年の記憶だ。

「でも、佐伯さんがいなくなったら大変ですよ」

「何とかなるわよ、そのときはそのときで」

自分が特別この業務に向いているとは思っていない。長年の経験により、多少は他の職員より耐性がついているのかもしれないが、もっと意欲にあふれる才能のある人がいれば喜んで変わりたいというのも偽らざる気持ちだ。そのほうが自分にとっても、関わる家族や子どもたちにとっても望ましい結果を生むのではないか、いや、きっとそうだろうと人事異動の季節にはぼんやりと感じている。

三島を気遣うつもりが自分のグチになってしまったことにため息が漏れる。どうか深刻

な事態ではありませんようにという願いを込め、弱い雨の打ちつけるフロントガラスの向この景色を佐伯は見つめていた。

相談所を出て30分後、保育園に到着した。指定された裏手の職員駐車場の隅に車を入れ、主任の案内で園児の声でにぎやかな廊下を抜けて職員室へ通された。入り口の引き戸を占めると喧騒がずっと遠のき、緊張した女性園長の表情に似合いの雰囲気だ。園長及び主任との名詞交換に続き、簡単な自己紹介の後早速確認作業に入る。

「これなんです」

ベテランの風格漂う園長によって応接セットのテーブルの上に示された数枚の写真には、はっきりと目立つ茶色い(?)あざが確認できた。佐伯の経験から見て軽くぶつけたという感じのあざではない、強い力が加わったものだろうと推測される。

「児童の様子が変わったところがありますか？」

「このところ、服装がちょっと.....、洗濯していないようなよれよれのもので、体の臭いも少し気になります、お風呂に入っていないのかもしれませんが。必要な持ち物の用意ができないことがときどきあります」

佐伯の質問に答えるのは園長だ。主任は隣で控え、こちらの三島はノートに記録をとっている。

「それと、今日はおなかがすいたって言うのでここでパン1つと牛乳をあげました、こんなこと以前にはなかったんですが」

朝食を食べてこない園児、食べさせてこない家庭への対応として用意してあるものだという。

「今朝の保護者の様子はどうでしたか？」

「送ってきたのはお父さんで、担任が会っています。こここのところはずっとお父さんが来てるんですが、ちょっと疲れているような、そちらもやっぱり服装がちょっときつちりとはしていない感じで、反応がぼんやりとしているような感じもあったということです」

「あざについては？」

「何も話はなかったそうです」

「担任の先生にもう少し詳しくお伺いできますか？」

「はい、呼んでまいります」

主任が席を立てて廊下へ出て行く。引き戸が閉まると園長が先ほどよりも不安の色を濃くして尋ねてきた。

「どうなんでしょう、虐待とみるべきなんでしょうか」

「どうだろうか、ケガの度合いは無視できるものではないということでは言えるだろう。」

「事実としてあるのはあざの存在です。けがをしたということだけで虐待と判断することはできません、その背景にある怪我をした時期や状況を確認しないと何ともいえませんが.....」

保護者に状況を確認してどの程度の説明をするか、軽い注意にとどめるか、それとも警告レベルまで踏み込むか。判断はこのままだと深刻な事態に発展するか否かを見極めてからになる。

「家庭の状況が以前と変化していることが想定されます。その方面も児童相談所で調査をしていますので、それらをふまえて総合的に判断することになります」

「そうですか、すみません、私こういったことにあまり経験がないので、どうしたらいいのか.....」

うつむきがちに弱々しい声を出す園長を気遣うように佐伯が声をかける。

「園長先生、児童虐待の問題は園だけで解決できることではありませんよ。私たちや市やそのほかの児童をとりまく大人のチームで役割分担をしながら対応していくものなんです、ご心配はお察ししますが一人で抱え込むことはないんです。おそらく担任の先生や園内のほかの先生方も同じような不安の中にいらっしゃると思いますので、気がかりなことがありましたら小さなことでもご連絡ください」

先ほどまでの事実確認とは口調をやわらかく変え、ゆっくりと落ち着かせるように話した。その気遣いが伝わったのか、園長も少しほっとしたような表情を見せる。

「失礼します、野々村入ります」と声が聞こえると園長が歩み寄って引き戸を開け「どうぞ」と招き入れ、応接ソファに座るよう促した。

「担任の野々村です、去年から豊君を担当しています」

まだ若い感じの女性の保育士は固い表情と仕草で挨拶をすると腰掛けた。改めて佐伯と三島が自己紹介し、確認を続ける。

「園長先生にある程度伺ったのですか、もう少し詳しくご家庭のことを教えてください、豊くんのお父さんの職業は？どこにお勤めですか？」

園長が年長クラス園児ファイルをめくって答える。

「こちらの記録では自営業となっていますね.....野々村先生、自営業ってどんな？」

「お仕事の内容まではあまり詳しく聞いたことがなくて、でもご自宅でお仕事をされているということですよ」

佐伯と三島が身を乗り出して安田家のページを覗き込む。連絡先の登録は両親の携帯電話、父の勤務先の電話も同じ番号だ。さらに気になる項目を指差しながら佐伯が担任に顔を向ける。

「お母さんはお勤めされていますね、最近は送り迎えには？」

「みえてないです、以前はほとんどお母さんが来ていたんですが」

「いつ頃までですか？」
「確か去年の秋頃までです、それからはずっとお父さんです」
「そのほかの祖父母の方などは？」
「近くにいないそうで、みえたことはないです」
連絡先にも県外の住所で父方の実家の記載があるだけだった。頼れる身内がないとなると、母親の仕事が多忙になっているとしたら父が来るしかないのだろう。
「お父さんはどんな印象の方ですか？」
「以前はお母さんと園の行事にも来ていて、そんなに保護者の輪に入っていき感じではないんですが、もう少し明るい感じだったように思います」
「今朝の様子も？」
「はい、10日ぶりの登園だったんですが、しばらく休んでいた理由についても具体的に話はなくて、ちょっと調子が悪くてとだけ。私としては豊くんよりもお父さんの方があまり体調がよくないのかなと思うくらいでした」
登園記録には今月の最初から欠席のスタンプが並んでいる。父が自営業なら欠席の理由が子の体調不良というのは納得できる。ただ、父の調子があまりよくないなら、家庭内でのストレスが高まっている可能性はあるだろう。
「豊くんとお父さんの関係はとうですか？」
「最近はずき言ったようなお父さんにあんまり元気がないような様子なんですが、以前はお父さんが来ると豊君も嬉しそうで、お父さんからもお家での豊君の様子を話してもくれています」
とりあえずはこのくらいかという感じで横にいる三島に視線を向ける。
「あとは児童の確認でいいと思うけど、何かある？」
「いえ、いいと思います」
三島はメモを取っていたシャープペンを一旦胸ポケットにしまう。
「この資料のコピーをいただけますか」
三島の依頼に園長が「わかりました」とファイルを持って立ち上がる。
「それで、豊くんは今どこに」
「今日は雨なのでクラスで遊びの時間です」
「連れて来てもらうことはできますか、あざの状況などを確認したいので」
「はい」と園長が答え「お願いね」と促された担任が立ち上がり、足早に職員室を出ていく。
それからすぐに担任に手をつながれた児童が職員室へやってきた。若干よれぎみの衣服は確かに清潔とは言いがたい。
佐伯がしゃがみこみ、笑顔で声をかける。
「こんにちわっ」
「こんにちはあ……」
知らない大人いきなり声をかけられたゆえの緊張した表情だが、おびえたような印象はない、早く遊びにもどりたいという様子が伺え、子ども自体に心配な様子はないという園の見立ては間違いないようだ。髪の毛や皮膚の汚れはが気になる点ではあるが。顔や手足にも目立つ傷などはない。
「おばさんねえ、豊くんが体操すごく上手だって先生に聞いたの、だから見せてほしいんだ、いいかなあ」
「うん」
「ありがと～、じゃあ、ばんざ～い」
「ばんざ～い」
佐伯が両手を挙げるのに合わせて豊くんが両手を上に上げる。
「上手～、じゃあ次はぐるぐる回って～」
佐伯が自分の両手で豊くんの腰に触ってひねり、回るよう促すと、足をちょこちょこ動かして1回、2回と回ってくれる。ちょうど後ろ向きになったところで手首をやさしく握る。
「は～い、おててを下ろして～、いい子いい子～」
腕から肩、頭頂部へと手を移動させ、抱きかかえるようしにて後頭部を覗き込む。見えた線状のあざはまだ赤色が強い。受傷はここ1～2日かと思われる、もっと日数が経っていれば黒ずんでくるはずだ。
写真を撮っていた三島が担任に耳打ちしすると、担任が豊くんに話かけた。
「豊くん、お話ししてくれる？」
「なあに」
「きのうとかおとといにお医者さんに行ったかな？」
「ううん」
「もっと前には行ったかな？」
「ううん、行ってな～い」
担任と話している間にも体のあちこちに目を走らせていた佐伯はそれを聞いて「いいですよ」という顔を担任に向け、豊君を自分の正面に向けて話しかける。
「豊君ありがとね～、上手だったね～」
「もっとできるよ～」
「うん、ありがと、またおばさんに見せてね、ばいば～い」
「ばいば～い」

豊は右手をひとしきり振ったあと、その手を担任とつないだ。
「ありがとうございました」と佐伯が担任に伝える。
「もう、よろしいんですか？」意外そうに園長が佐伯のほうを伺う。
「はい、お部屋に戻ってもらっていいですよ」
その声を合図のように担任は豊に「はい、じゃあ行くよ～」と声をかけ、廊下へと歩き出す。
「はいば～い」
豊は再度佐伯に手を振ってくれた。担任が「失礼します」と扉を閉めると再び職員室の雰囲気はしんとしたものになった。
「あれだけでいいんですか、もっとその、いろいろと」
園長はあっさりしすぎていると言いたげに、豊の出でいったほうと佐伯を交互に見て尋ねた。
「傷の状態を確認するのが一番重要なので、今はあれくらいで十分です。場合によっては今後別の者が聞き取りをさせていただくことがあるかもしれませんが」
「そんなものなんですか」
「はい、それでは一旦お話はここまでということで、ありがとうございました」
三島とともに会釈し、所への報告のために携帯を取り出した佐伯は少しでも静かな位置を探し、職員室の隅へ向かった。
「はい、東部児童相談所、河原です」
「班長、佐伯です。調査はひととおり済みました」
「ご苦労さん、どんなだ？」
園での聞き取りと児童の状況を手短かに説明し、印象を伝える。
「というところで、一旦様子見でもいい状態かと」
「そうか、しかしな、こっちは雲行きが怪しいんだわ」
その言葉に比例するように河原の声のトーンは暗く厳しいものになっている。
「何か？」
「この子の母親な、1月に死亡している」
「ええっ！」
傍にいた三島がメモの整理の手を止めて驚いたようにこちらを向く。思わず出た佐伯の声はかなり大きく響いたようだ。
「園からはそんな話はないみたいだな」
「はい、全く、普通に家にいるかと思ってました」
「住民票での確認でわかったことだ、市でも死亡の経緯は把握していない。普通は園に言うと思うんだよな、子どもへの配慮とかもあるし」
「何か……、不自然ですね」
佐伯の中の先ほどまで聞いていた父親についての印象に影が落ちる。
「警察に情報提供を依頼しているとのだが、何かあるかもしれん、そうだったらちょっとこのまま帰すのは怖いところだな」
「家庭内の様子はかなり変容している可能性があるということだ。」
「DVとか、犯罪がらみの」
「まあ、何も確定してないけどな。すぐ所長と協議するから、そのまま保護もありうるってことで待機しといてくれ」
「はい、わかりました」
通話を終えた佐伯の顔を三島が心配そうに覗き込む。
「ちょっと、厄介かもよ」
園長に聞こえないような小声で最低限の情報を伝えられた三島の顔にも影が落ちた。
「という状況です」
河原は現時点での情報を全て田澤に上げ、判断を仰いだ。
「あざの経緯を詳しく確認したいな、事故であっても対処してなければネグレクト（育児放棄）の線もある、故意ならなおさら帰宅させるのは危ないだろう」
田澤の声には緊迫感がみなぎっている。
「はい、明日の登園の確信もありませんし」
「今晚何が起きるのではという懸念は河原が付け加えるまでもない。」
「万が一を考え、児童の安全のために分離した状態で父親の反応を確認する必要があるだろう。理由は虐待を前面に出さずに話を聞きたいというトーンでアプローチをしよう」
児童相談所としての方針は決まった。
「すぐに一時保護だ」
「はい！」
河原は佐伯の携帯を慣らし、ただちに一時保護するよう指示を出した。
「保育園から所へ移送したらいつもの小児科で健康診断にかける、その後一時保護所へ。戻ったら父親に連絡入れて面接設定をしよう」
「わかりました、至急連れて戻ります」
佐伯は電話を終え、様子を伺っていた不安げな表情の園長に今後の対応について説明した。
「お父さんが迎えに来たら児相へ連絡するように伝えてください。何を聞かれても児童相談所の判断で保護していったので、園では詳しいことはわからないとだけ答えてください」

名刺をつけた児相のパンフを園長に渡すと佐伯は静かに、しかしはっきりと告げた。
「豊君を児童相談所で一時保護します」

慌しく豊の一時保護所への移送までの段取りを終えて所に戻ったのは保育園を出て3時間後だった。

後追いになる必要な書類の作成を三島に任せ、佐伯は何度かの試みの後、河原に報告した。

「父親電話つながりません、留守電にもなりません」

電話は時間を置いてかけ続けることとし、その間に地区担当の平田が自宅へ直接伝えに行くことになった。

30分後、平田から河原へ連絡が入る。

「自宅のインターフォン押しても反応ありません。不在のようです」

「こっちもまだ連絡が取れん。連絡メモを入れて戻ってくれ、それと市の児童課へ回って資料のコピーを頼む」

その後、平田の持ち帰った資料を確認していた佐伯の目が古い記録のある部分で引っかかった。

「3年前の資料で自宅電話の番号があります、一応こっちにもかけてみます」

保育園のファイルにはなかった番号だ。果たして今も使われてるかは不明だったが、機械音声ながらも反応はあった。

「使われてます、留守電になりました」

別人の電話に変わっている可能性もあるため、佐伯は自分の名前と相談所の連絡先、連絡がほしいという最低限の内容だけを録音指示の後に吹き込み、受話器を置いた。

「あとは反応待ちだな。今のうちに佐伯と三島はメシ食っといて」

保育園への届出では18時が迎えの時間になっていた。おそらくその付近で反応がある可能性が高いただろう。それまであと1時間ほど猶予はある。

「俺はもう食ったからさ」という河原の言葉に頷き、取りそびれた昼食分のエネルギーを求めて2人は児童相談所近くのコンビニへ走り、おそらくその摂取の余裕はないだろう夕食分まで見越して高めのカロリーが取れるものを手早く選んだ。佐伯は消化に悪いことなどもはや諦めた速度で胃袋にぶちこみ、少しむせたところにささやかに体を気遣う気持ちで選んだ野菜ジュースを投入し、臨戦態勢を整えた。

『ラーメンは急ぎの電話が終わるまで伸びるのを待つてはくれない、緊急の呼び出しに焼肉定食のお盆を持って店を出ることはできない』誰が言ったか知らないが、真理であると思ひ、胸に刻んでいる。

虐待対応班のメンバーはその他の業務をこなしながら、時折時計を気にして連絡を待ち続けた。そして、18時を少し過ぎてかかってきた安田篤人からの電話は佐伯との少しのやりとりを経て「行けたら行きます」という言葉で締めくくられたのだった。

< 第2章 来れたので来た >

佐伯と篤人のやりとりはスピーカーフォン機能を利用して行っていたため、周囲にいた虐待対応班の面々にも伝わっており、「行けたら行く」と言って切れた篤人からの電話に、度合いの差はあれど誰もが言葉を失った。

「なんですか、『行けたら行く』ってのは、この世で一番あてにならない言葉ですよ」

その呆然とした空気に耐え切れず、一番に口を開いたのは佐伯だった。

「そんなに悪く決め付けちゃいかんでしょ。行かないって言われるよりはいいんじゃない？」

河原がなだめるように応える。

「はっきりと言わないだけで『実は行きたくない』と同義の言葉でしょう？」

「俺は『行きたい気持ちはあるけど、ひょっとしたら事情が許さないかも』って取るけどね」

「そんな期待してたら痛い目に会うのが現代社会ですよ」

何か過去に嫌な経験があるのだから、佐伯は否定的な論評をする。

「確かに初めて聞く反応ですね、何をしてくれてるんだと怒るわけでもなし、今すぐ行くから首を洗って待ってると脅すでもなし……」

三島も驚きと呆れの入り混じった印象を持っている様子だ。

「口調からはエネルギーがあんまり満ちて無いて感じはあるなあ。でも『行けたら行く』がどっちの意味かは判断しかねるよ、その言葉だけにとられるのもあんま意味ないでしょ」

河原の分析には佐伯も「まあ、そうですね」と頷く。

「なんだか、ある意味とんでもない親かもしれませんよ」

「レベルの違いこそあれ、いろいろとでぼこのある方が俺たちのお客さんなわけよ」

少し緊張が解けたように河原が伸びをする。

「さーて、大当たりか大はずれか」

「どっちがいいんです、それ」

「どっちにしても、手こずることは変わりなさそうだ。とりあえずいつおいでになるかわかんないから、早めに作戦会議といこうよ」

児童相談所に戻ってから佐伯がまとめた追加情報は次のとおりとなった。

- ・ 豊の母の死亡は自殺、事件性なしとのこと。死亡場所は母の実家のある市。
- ・ 3年前の市の対応は母によるネグレクト疑いだったが虐待案件としては扱わず、保育園の入園支援をして見守り中だった。保育園でのこれといった問題の報告がないので集中的な対応は終了していた。
- ・ 母方両親は離婚し、母は幼いころから母子家庭。結婚後の実家との交流はほぼ無い。
- ・ 父方両親は健在だが高齢であり、少し介護が必要な状態。父の兄（単身者）が同居している。県外在住でもあり児童への支援は難しい。
- ・ 保育園の保護者同士のつきあいは母も父もほとんどなかった。親しい友人はいない様子。

「保護するとき、子どもの様子はどうだった？」

過去の記録をまとめた内容の報告が一通り終わると河原が尋ねた。

「保育園で『これからお医者さんのところに行くよ』って担任の野々村先生から伝えてもらって健康診断するところまではスムーズでした」

先ほどの慌しい一時保護の流れを思い出しながら佐伯が説明する。

豊はあまり緊張しない様子で小児科の診察も終えた。担任が同行してくれたことは佐伯にとってもありがたかった、血縁のある近い存在がほばいない豊にとって不安を少しでも和らげるには、長い時間過ごしている保育園の関係者の存在が欠かせない状況だった。その後移動した一時保護所では、保育園とは異なる年上の児童も多いこともあり、不安そうな様子が見えた。明日も病院に行くから今日はここに泊まること、また明日佐伯が迎えに来ることだけをひとまずは伝えた。一時保護所での生活ルールなどについては職員から説明をもらった後、退出しようとした担任と別れるのを拒み、「行っちゃだ」となかなか手を離そうとしなかった。気持ちを落ち着けるために、担任にしばらく抱っこをしてもらい「待ってるからまた元気に保育園に来てね」と優しくなだめてからなんとか児童の生活スペースへ連れられて行った。担任は初めての経験ということもあるのか、車に乗り込んで保育園へ送る際にも涙ぐんでいた

誰も知っている人のいない環境へいきなり連れてこられたストレスは想像するに余りある、それは担任と同じように佐伯も抱く思いだ。保育園児である豊に一時保護の理由やこの先の見通せない状況などを説明するのは難しいが、なるべく細やかにフォローをしていく必要がある。この後の篤人との面談の状況によっては理解が難しいことも伝えなくてはならない、納得するといっても無理なこと多くあるだろうことが予想される。心理面のケアの担当になる児童心理士にもなるべく早めに、そして頻繁に会いに行ってもらおうと佐伯は考えていた。

「一時保護にあたっての健康診断の際の確認では、傷の状態は事故とも故意ともとれるものとのこと。通報のあった後頭部のほかには外見及び児童への聞き取りから他に目立つあざなどの様子はみられませんでした」

三島がその際に撮影した写真を示しつつ付け加えた。

「そこはとりあえず安心の材料だな、今回は突発的で初めての事態であってくれたらいいんだが。まあ、明日以降のちゃんとした診察と、親御さんの話を待たんと判断はできんがね」

いつになるか分からないが、おそらく篤人は児童相談所に来るだろう。その際の面談の児童相談所側の目的は、母が死亡したときから現在までの養育状況と今後の見通しの確認。今回のケガについての聞き取りによる親子関係の把握をし、家庭の危険度を再判断することになる。保育園が心配していた休園理由の把握と、篤人の体調についても見極める必要がある。

面接の着地点としては、2つの場合を想定した。危険度が低く、家に帰す場合には、継続的な児童相談所での親子が分かれての面接実施の同意を取り付ける。その上で保育園への登園を継続すること、欠席の場合は必ず連絡をすること、児相の家庭訪問を受け入れることを条件にする。ただし、帰宅後に親子が2人きりにならない状態であることが大前提となる。

帰せないと判断された場合、帰宅できる条件の設定をする。家庭での養育環境及び保育園を始めとした支援体制を整備し、児童の安全が確認できる体制構築に同意すること。加えて篤人の生活状況なども含めた家庭環境の安定が、誰が見ても大丈夫と思える水準となることを目安とする。いずれも同意が得られなければ、やむを得ず児童相談所の権限による一時保護を継続し、日を改めての面談で対応についての理解を得ていくこととする。

とりあえずの対応方針は決まったが、事態はどう転ぶかわからない。腰の落ち着かない感覚を抱きつつ、できることをこなしていくしかないこの時間はなかなか緊張を強いられる。いちいち考えていてはきりがいいことは頭ではわかるが、豊が一時保護所で今抱えている不安な気持ちに寄り添える体制がないことが申し訳なく佐伯には感じられた。

親にとっては理不尽とも感じられるまでに児童の安全を守るということに重きを置いているのに、その後の児童への配慮が不十分と言われれば返す言葉につまる。十分な準備とメンバー構成で行える対応などほとんどないため、バタバタした綱渡りのような日々の過ごし方は自分にとっても、関わる児童にもいい結果を生む環境であるはずはない。それでもできる限りのことをやるしかない、そんな思いを抱きつつ待機している時間は佐伯をはじめとする各員の貴重なデスクワークの消化時間に当てられた。

「あー、秘書がほしいなあ」

靴屋の童話のように、寝ている間に小人さんがこの書類を片付けてくれないものかと半ば本気で思い、佐伯がぼやく。

「いいねえ、俺もポケットマネーでいいから雇いたいもんだよ。マッサージとお茶を入れるのも上手だと申し分ないね」

河原が言う冗談が本気がわからないが、確かに残業代で十分一人くらい雇える計算にはなる。現実には人を一人雇うことに付随する細々した手間もあるし、こんな個人情報てんこもりで刺激とストレスが過剰な職場環境に適應できる人がいるかという大きな問題もあり、はかない願いはいつも霧散するのだが。佐伯は強制的に居残りをせざるを得ないこの時間と、当たり前のように誰も帰ろうとしない連帯感とその代わりだと解釈し、たまりにたまった細切れ仕事をがりがりとこなした。

2時まで待ったが結局連絡は入らなかつたため、事務所の施錠をし、河原の持つ24時間対応の緊急携帯電話への連絡を予期しつつ全員が帰宅の途に着いた。

赤いコンパクトカーを運転して一人暮らしの1LDKの部屋に佐伯は帰宅した。少し交通の便が悪い児童相談所勤務になってから、モデルチェンジに合わせて2度買い換えた現在の愛車である。どうにも気持ちが晴れない夜などは、懐かしめのナンバーを流してカラオケボックス代わりにしつつ、ドライブを2時間ほどするのが数少ないストレス解消方法だ。

電子ロック扉横のメールボックスの中身をつかみ、3階までの階段を上がる。思うように行けていない美容室とレストランからのダイレクトメールと、部屋にあまりいないがゆえにやけに安い請求金額になっている公共料金のお知らせをランプのようにめくって流し見しながら自室のドアの鍵を開ける。

「こんだけ使う暇がなけりゃ、貯まるわよね」

残業が一定時間を越える職員に義務づけられているメンタルヘルスの講習で聞いた「健康に悪影響を与える水準」を軽く超えてしまっている佐伯の時間外手当は、基本給と合わせれば新車への買い替えもまるで躊躇しない額にはなる。けれど、お金で時間が買えるなら買いたいぐらいのプライベートの非充実さ加減には不満山積だ。部屋の大掃除やレストランめぐりを夢見て、髪の手入れもそれなりのおしゃれ着もご無沙汰になっているのは女としてどうかと思うが、半ば自虐気味に「女であることを忘れたほうが楽」とまで言ってしまう自分がここにいる。職場ではもはや何も言われないが、作業着を一年中羽織っているのは、それなりに見られる服をほとんど実家に戻してしまったせいでもあるが、それはたんのすの肥やしにするどころか、大事にしていたスーツにカビを生やしてしまった苦い経験から来るものでもある。

それによって空いたクローゼットのスペースに何がいったかと言えば、服を実家に運んだ際「服を置いてくんなら、ここにある物を何か捨てるか持って行きなさいよ」と母に言われたために連れて来た段ボールが数箱だ。そもそも必要がないので実家に置いて来たそれらは中身を気にすることもなかったのだが、唯一外へ出したのは一匹のうさぎのぬいぐるみだった。名前はうさ子、幼稚園の頃から大学進学で家を出るまで十数年にわたって起居を共にした身長80センチちょっとの色あせたピンク色の相棒だ。四捨五入で40に

ならんとする独身女の部屋にいるのは心理学的な分析をされたらちょっと怖い気もするが、読みかけの本をそのおなかに乗せ、おやすみと呼びかけるとき、ちょっと気分が安らぐのは確かだった。

親以外はほとんど来ないこの部屋、河原が言うような気の利くお手伝いさんでもでもいってくれたらいいのにも思うが、そのときはうさ子をどこかに隠さないといけないかな、などと考えつつ湯船にお湯を張る。ストレッチなど、明日に向けて体力の回復に資する行動を積み重ねているうちに睡魔に身をゆだねそうになったが、給湯終了のアラームに意識をなんとか引き戻され、入浴をスルーしてしまう失態は避けられた。これが女としてのギリギリとしての一線を守れたことになるのかなどと感じつつ、横になってすぐの2度目の睡魔の来襲に抵抗する術なく眠りに落ちた。

「すぐには無理です、今日行けたら行きますよ」

そう答えて電話を切った後、篤人がソファに横たえていた体を起こすまで15分ほどを要した。

頭が働かない、これからやらなければならないことは何かと思考を巡らす、もやがかかったようにビジョンや言葉が出てこない。閉ざされた記憶の扉を開くようにマウスを握り、パソコンのスケジュール管理ソフトを立ち上げる。

18時の予定にあった豊の迎えはなくなった。そうなれば次は明日が締め切りの原稿が一つある。豊を寝かせた後に仕上げるつもりだったが、これに今からかかれるなら少しは余裕ができる。その先の締め切りはもう少し先のものが2つあるだけだ。とりあえずはこれを仕上げて、それから後のことを考えることにした。

ひたすらキーを叩き、発注元にメールで納品をし終わって時計を見たとき、日付は既に変わり2時を回っていた。こんなに時間をかけるつもりではなかったのだが、どうも最近ペースが上がらないと感じる。出来のほうも正直どうかと思われる水準だった。しかしともかく間に合ったことが何よりだと少しの安堵を覚えた。

少し頭を休めようと考え、こわばった眼球とまぶたをマッサージする。ここ最近、ずっとこんな体のだるさが続いているような気がしていた。一向に回復しない頭の重さに浅いため息の一つ吐き、夕方の電話で告げられた東部児童相談所の場所をネットで検索し、プリントアウトする。電話番号を携帯に登録しておこうといつもの置き場所に手を伸ばしたが、いつの間にか充電器から転げ落ちたのか、携帯は電池切れになっていた。充電器にセットし直し、充電中を示すランプが点灯したのを確認する。そして電話でのやりとりに出てきた耳慣れない言葉をあれこれと検索しているうちに、夜は白々と明け始めていた。

翌朝、児童相談所の始業開始と同時に篤人から電話が入った。佐伯が対応したところ、すぐにも伺いたいとのことであったため、面談の時間を9時30分に設定した。

約束した時間の10分前に受付から篤人が来所したとの知らせが入り、佐伯は河原と共に、2階のロビーへと向かった。3階の事務室からは1階分の階段を下りるだけだが、この階段を通るときにはマラソン大会のスタートの瞬間に似た息の詰まる感覚を覚える。

受付の女性スタッフが手で示した先のソファには、痩せ型で40歳としては標準的な背丈の男性がいた。ファッションはフリーランスらしいラフな感じ、若干放置気味に感じられる白髪が少し見える短髪を含め、あまり外見に気を使ってきたという感じではない。全体的に昨日の保育園で会った豊とどこか同じ雰囲気漂っている。

初めての保護者との面談時に抱く、びっくり箱の中身を覗くような緊張を感じつつ佐伯が声をかけ、お辞儀をする。

「こんにちは、児童相談所の佐伯です。突然お呼びたてして申し訳ありません」

男は立ち上がり「安田です、はじめまして」と固い会釈を帰した。向かい合うと身長163センチの佐伯より拳一つ分ほど高いのだが、線の細さゆえか篤人による圧迫感は感じられない。

「河原です、佐伯の上司にあたります。同席させていただきますのでよろしくお願ひします、どうぞこちらへ」

河原の先導で廊下の奥の相談室へ向かい、テーブルをはさんでソファに座って向かい合った。

改めて見ると篤人は頬が少しこげ、目のまわりにはくぼみというかくまがある。髭も少しそり残しが目立ち、肌も荒れている印象だ。河原とは年齢が一回り違うはずなのだが、あまり若さを感じるとは言いがたい外見だ。

「まず最初に豊くんを保護させていただいた経緯と、今の状況をご説明します」

会話の口火を切ったのは佐伯だ。

篤人は「どうぞ」という感じで軽く顎を振り、まっすぐ佐伯の方を向いて、とりあえずは聞きましようという姿勢を取っている。

「昨日、保育園で豊くんの後頭部に線状のあざが発見されました。ケガの状況によっては豊くんの身体の安全が心配されたため、保護者の方にお話を伺う必要があると児童相談所は判断しました。加えて、最近の保育園の休園や、豊くんのそのほかの様子などから、ご家庭で養育にお困りの点があるのではないかとおそれましたので、落ち着いてお話をする時間を取っていただくために、保育園に児童相談所の職員が出向き、一時的に豊くんを保護させていただきました」

佐伯はゆっくりと、そして余計な刺激を与えないよう言葉を選んで説明し、篤人あての一時保護決定通知書を差し出した。

「それで、豊は今どこにいるんですか、いつ帰ってくるんですか」
書類を一瞥し、篤人が反応する。発せられる口調にはあまり抑揚がなく、どのような心理状態なのかをつかみかねる声だ。
「一時保護所という施設でお預かりしています、保護の期間がどのくらいになるのかは、これから伺うお話の内容などをもとに判断させていただくことになります」
佐伯は一旦言葉を切り、篤人の反応を待った。ここで「ふざけるな、人さらいめ」というように激昂する保護者も少なくない。
が、篤人は先ほどとほとんど変わらない口調で返してきた。
「話次第ではすぐに帰ってくることもあるということですか」
その可能性もなくはない。最終的には篤人の思うような結果にならない場合もあるが、最初から否定的な予測を示すことに利益はない。この流れを活かすことがまずは大事だ。
「はい、そのような判断になることもあります。その判断をするために必要なことですので、豊くんのことやご家庭のことを伺わせていただこうと考えています」
こちらの提案に乗ってくるか、否か。篤人の反応を見極めようと神経を研ぎ澄ます。
篤人は提案の内容と、それを受け入れることによる成果を吟味しているかのように視線を外した。しばらくの沈黙の後、浅く呼吸をし、篤人は答えた。
「わかりました、何を話せばいいんですか」
とりあえず話の流れには乗ってくれたようだ。
「では、まずご家庭のことをお伺いします」
いろいろな関係者から篤人と豊をめぐる状況については情報を得ている。しかし直接聞くことはその状況についての情報を出してくるかや、表現の仕方などによって事実以上の内容が伺い知れる。そしてこちらに調査の権限があるとはいえ、自分からしゃべってもいないことを相手が知っているという状況に反発を覚える心理も考慮し、本人から聞き取るこの意味は大きい。
家族構成や親族関係は事前の調査どおり、妻の死亡についても隠すことなく年が明けてすぐに亡くなったと淡々と事実を述べた。仕事はフリーライターで経験は2年と少し、コンピュータソフト会社で十年ほど勤務して退職したとのこと。豊のためになるべく昼間に仕事をしようとしていたが、最近は寝かせてからの作業も多いこと、そのため自分が起きられなかったり、豊が行きたがらなかったりということが続いたので保育園は欠席していた、ということが語られた。
聞く側からすれば、一人きりでの子育てをしつつ、実力主義のフリーランスの仕事をしている現状には苦勞も多く、グチの一つもこぼしそうに感じる内容だ。しかし、隙を見せまいとしているかのように、自らの心情については言及がない。
ここまでのやりとりはいわば双方のペース合わせ、大きなゆさぶりも反発も発生しない、しかしここからが肝だとはばかりに佐伯は質問のギアを変える。
「豊くんの後頭部にあるあざについて、ご存知ですか？」
篤人の目にわずかながら意思が宿ったように見えた。視線が佐伯をとらえる。
「そんなものがあるんですか？」
ためらう様子もなく逆に質問をする。わずかながらに篤人の感情に揺らぎが生じているように見える。それが自己防衛なのか、純粋な疑問なのかまでは判断できない。
「はい、昨日の登園後、担任の先生が気付かれました。つい最近できたようなあざのようなんですが、ここ数日でそのあたりを強く打つようなことはありましたか？」
「さあ……、覚えがないですね」
「痛みを訴えるようなことは？」
「特には、なかったです」
「そうですか、見たところ少しぶつけたという感じではない、それなりに痛みを伴うようなあざのようなんですが……」
「何が言いたいんです？ 私が叩いたと言うんですか」
感情がもう一段上乗せされたような口調には空気を押し固めるような力が感じられる。
「いいえ、医師の診断でも事故の可能性もあるとのことでした」
佐伯が即座に断定しているわけではない、と補足する。
「当たり前です……、叩いてなんていませんよ」
今のところ想像よりも反応の口調はヒートアップしていない。次の言葉によって篤人の反発は強まるかもしれないと思いつつ、佐伯は続ける。
「しかし、事故であったとしても、それにお気づきになっていないとしたら、少し気がかりなことがあるんです」
「何がですか？」
「そのとき、安田さんはどうされていたかということです。事故があっても充分に対処できない状態というのは、お子さんにとって安全に心配のある状態ではないかと考えます」
「このくらいの年齢なら自分でケガをすることはいくらでもあるでしょう。どこの親だって完璧に子どもを見てるわけじゃない、ましてうちは私一人ですよ、自分のことは何もしないでずっと子どもを見られるわけじゃないでしょう！」
やりとりの度にひりひりするような緊張感が高まる。
「それはおっしゃるとおりです」
「それじゃ何ですか、児童相談所は、あざのある子をみんな保護してるんですか？ そうだと言ってうんならよっぽど豊よりひどい……」
ここまでで一番に高まったように思える篤人の感情に気圧されそうになるが、このまま

言葉をぶつけ合うことが目的ではない、という意味を示すようにゆっくり河原が身を乗り出し、篤人の言葉と感情を押し留める。

「安田さん、ご気分を害されましたら申し訳ない、こちらの言葉が足りませんで」

二人の対立になりそうな空気を低い落ち着いた声が緩和させる。

「豊くんのことがご心配でしょうし、私共も早くお家に戻れるのが一番いいと考えています」

話の方向性の急な切り替わりを感じたのか、いぶかしげな視線を篤人が河原に向ける。

「そのための安全確認が児童相談所の役割です。そこはご理解いただけますでしょうか」

「安全確認……？」

「ええ、今回は保育園であざが確認されたことをきっかけに、安田さんにご心配をかけ、お忙しい中おいでいただくことになっています。当然のことながらこういったことはないほうがいいんです」

「それは……、そうですね」

「何もこんなことぐらいだと、不本意というか、お節介に感じられることもあるかもしれませんが、しかし最近色々な事件や事故がより身近で起きているということもありまして、お子さんの安全というものに対する周囲の目というのは敏感になっている状況なんですね。保育園もこういったことがあった場合は、児童相談所に連絡しなければならない義務があるんです」

今回の保護は特別に重大な事態と判断されるようなケースと決まったわけではない、というニュアンスを含めて言葉を続ける。

「もしかすると今後また、保育園に限らず、どこか別のところからの心配の声が入って再度保護になることがあるかもしれません。そういったことがないようにするのが、今日お話をうかがっている一つの目的なわけです」

篤人は次第にこちらの話に「聞く」体勢に戻っている様子が見受けられる。その変化を見極めるように河原の言葉はゆっくりと続く。

「お伺いしたところ、安田さんは環境の変化が多くある中で豊くんのことについて心を砕いていらっしゃると感じます。奥様のご不幸でお悲しみの中でも、ほとんどお一人でごんばってこられた、なかなかできることではないと思います。しかし、それと同時に今までどおりの生活をしていくのは難しいとお感じになっているところもおありではないかとお察しするのですが、いかがでしょうか」

「それは……」

河原は責めるばかりではなく、困難な事情やそれに立ち向かう篤人の苦労や尽力も認める姿勢を示す。その言葉には、ここは篤人を非難する場ではないとのメッセージが含まれている。

「安田さんの頑張りでうまくいっている部分もあると思います。しかしながら、できればもっとこうできたらとお感じになっている部分もあるのではないのでしょうか」

「……確かに、そういう部分はあります」

「ここで一旦、課題を整理して安田さんと豊くんの両方の生活の建て直しを計ることが必要な時期なのではないかと考えます。誰もが心配な目で見るのではなく、安心して見守れるような」

「……つまり、結論としてはすぐには帰せないということですか」

篤人の目に反発と失望が混じったような雰囲気が浮かぶ。しかし河原はそれに同じ種類の態度では返さない。

「豊くんにとって安心・安全な環境であることを確認させていただければ、お帰しできる。そう捉えていただければと思います。そのために必要なお手伝いをさせていただければと考えています。安田さんの側の体制づくりを行う間、豊くんはこちらで責任を持ってお預かりしているとお考えいただければ」

否定的な言葉には肯定的な言葉で返すことで衝突を抑える、経験によって培った作法だ。このまま帰宅させては、虐待があったかもしれないときと同じ2人きりになる。状況が再現されれば、同じ事象が起きる可能性がある、だから帰せないというのが大きな判断ポイントだ。しかしそれを直接言っただけでは感情をいたずらに刺激する。確認のためという理由で親子を分離する時間をかせぎ、その間に他者の目が入ることを想定した生活を送ってもらうことで、事故なり虐待なりが発生しにくい状態を作るのが狙いだ。

篤人は視線を落とし、長い沈黙を保つ。

これにもあせって言葉を継がない。空白を恐れず、相手のペースを落ち着かせ、あくまでこちらの押し付けはせず、反射的なものではない相手の反応を確認するのだ。おそらく篤人は今、どのあたりを自身の中で譲れない線として区切るのか、その見極めをしているのだろうと佐伯は考えていた。

「何がどうなればいいんです、具体的には」

条件しだいでは受け入れようという意向だろうか、こちらの方針を吟味するように篤人が口を開いた。その気持ちを受け止めるように河原は説明する。

「まずは日を改めて、もう少しお話を安田さんから伺いたしたいと思います。それと前後するかもしれませんが、お住まいの状況を確認させていただくためにお宅へ訪問をさせていただきたいと思います」

「家に来るんですか？」

「抵抗があるのはごもっともかと思いますが、どのご家庭にもお願いしていることなのでご理解いただければと思います。生活の環境はやはり実際に見て確認することに勝る方

法はないもので」

「……他には？」

「加えて、現在の豊くんについて医師の診断、これは今回のあざのことだけでなく全般的なことについて、児童相談所の心理士による面談も行いたいと考えています」

「判断に必要な時間的目安はどのくらいですか？」

「ご都合がよろしければ、ここ数日のうちにも動かさせていただいて、2週間くらいを目安にある程度の判断をさせていただこうと考えています」

「……わかりました。しかし、こちらにも仕事の都合や準備もあります。今すぐに日を設定するというわけには……」

「もちろんです、安田さんのご都合に極力合わせますので」

最後にとりあえずの次回面談と家庭訪問の日程を調整、都合が悪くなれば電話で再調整することを確認した。連絡先は携帯電話のほうが出られる度合いが高いとのことだった。

「それでは、本日はありがとうございました」

河原が会釈をするのに少し遅れて佐伯も頭を下げる。篤人もそれに応じる。これを区切りとして、ここでの話は一旦終了となった。佐伯が立ち上がりドアを開け、篤人と河原を通した後、自らも部屋を出る。

廊下を入り口へと戻る際、河原が篤人に話かけた。

「お忙しいところ、昨日は遅くにお電話してすみませんでした。何時にお休みでしたか？」

「いえ、仕事をしていて、明け方までぼんやりと起きていました」

「それは、お疲れでしょう、朝食はもうとられましたか？」

「いえ……」

「そうでしたか、長くなってしまい申し訳ありません」

「いえ、朝はあまり食べる気がないので、特に問題ないです」

「これからお仕事で？」

「締め切りがありますんで……では」

初回の面談はこうして終了した。

「どんな見立て？」

事務室に戻り、河原が佐伯に面談の印象を尋ねてきた。

佐伯はこれまでの9年と少しの経験の引き出しの中身と比較し、簡単なまとめをする。

「自分が十分対応できてないってことを否定するわけでもないですし、わりかし素直に指摘を受け入れたところを見ると、父親の性格的には協力関係の見通しはありそうですね。危険度はさほどでもってところでしょうか」

「もともとの性格と、あとは疲労感からくるエネルギー低下かもな、受け入れたのは」

「子どもに会うっていう申し出はなかったですね。次の面談もすぐっていう態度じゃないですし、仕事の締め切りが優先なんでしょうか？」

具体的に交渉ごとを進める気力がないのかもしれない。会話の中でも言葉のイメージほどこちらを攻撃して来る感じはなかったし、どちらかといえば正体の見えない幽霊みたいな怖さだ。

「豊くんの食事もちょうと心配な感じですね、家はどんなですかね」

「今行ったらえらいことになってるんじゃないかなあ、多分。近くに助けを得られる身内もいないようだし。家庭訪問してもそのままだったら環境改善には時間がかなり必要になるかもな」

深刻な暴力が行われている様子はなく、最悪の事態ではなかったが、親子ふたりだけの家庭内で篤人の側に安心の材料がさほど多いわけではない。抱えるケースまたが一つ積みあがり、虐待対応班の面々の肩と心に掛かる重みはじわりと増した。

とりあえず、明日の定例会議での報告のために作らなければならない資料のまとめだけでもなかなか骨が折れる仕事となりそうだった。そうしている間にも虐待対応専用ダイヤルは鳴り、次の相談は飛び込んでくる。

< 第3章 こわばる体と状況 >

児童相談所での面談を終え、どこにも立ち寄りず篤人は帰宅した。駐車場からエレベーターを使い、何も考えずにたどり着ける204号室。最近の風潮に漏れず、表札はどの部屋の前にもついていない。部屋番号によってのみ識別される自分の家。

昨日までは豊の声が響いていたこの部屋にいるのは自分一人。妻であった真理子がいなくなり、そして豊までいなくなった。無理もないが、と口から諦めにも似た言葉がこぼれる。

最大限好意的に見ても人を呼べるような家ではない。外廊下はまだしも、玄関ドアを開けてみればたたきからしていくつも靴が脱ぎ散らかされている。まずは、どこに今履いている靴を脱ぐかを考えなければならない。

どうにか隙間につこんだ靴から足を引き抜き、浴室につながる洗面所の向かいの洋室に目をやる。クローゼットという響きもはや意味を成さない状態で開け放たれ、整理も処分もできない物が山となっている。以前からクローゼットの左三分の1ほどは篤人のスペースという区分になっている。洗濯まではしたが、そのまま乾燥機につこんで乾かしただけの衣服が、しわになることなど全く無頓着に積まれている。どこまでが脱ぎ散らかしたものの境界線なのかはわからない。

昨日今日着ている服もその中で一番上にあったということだけが選択の理由だった。季節に似合いのラインナップは埋もれた衣装ケースの中で衣替えをずっと待っている。真理子のもを整理することができていないのも現状の一因なのだが、どうにも気が進まないでいる。

児童相談所という外部刺激の発生により、片付ける動機と必要性が生まれたのだが、とりかかるのは今すぐでなくてもいいだろうとスルーし、リビングへと向かう。とは言え、こちら散らかり加減に大差はなく、平らな空間の面積は少ない。わずかな隙間も片足を突っ込み、そこから次の足先を運ぶ中継点にするのがせいぜいの広さのものしかない。

背もたれや座面に衣服が乗っている様がまるで物干し台のごときソファにたどりつき、一人分の座面を確保して何とか腰を落着ける。何から始めるべきかを考えようとするが、時計の秒針の音が意識をイラつかせる。歩み寄って電池を抜こうとしたがフタがうまく空かず、先ほどぞんざいに端に寄せたタオルとウインドブレーカーの間にうずめた。それでも漏れてくる音にもう抵抗する気力もなく、再びソファに身を沈めた。

頭痛がする、足もふらつく。ここしばらくは休む間もなく目の前のことを片付けるという調子だったが、昨日から体が「疲弊」という概念を思い出したかのように、気にしていなかった疲れを突如ははっきりと感じられるようになった。

豊がこの部屋に帰ってくるためには、児童相談所の提示した条件をクリアする必要がある。要は今まで後回しだったり、目をつぶったりしてきたことで、世間一般が眉をひそめるようなことをちゃんと修正しろということなのだろう。その新しいタスクがぼんやりと、しかし重くのしかかる。できるものならそれはやっていたら。しかしそれが少しずつ積み重なった結果が昨日の出来事であり、この部屋の風景に象徴される今の自分なのだろうと思われた。

豊を一時保護したという電話での通告が、どうにも現実感を持って受け止められなかった。積み重なった物の山と、それを覆う冷えた溶岩のような荒涼とした頑強さ。真理子がいなくなった後に続けてきた行動の数々、何が起きてもただ淡々と片付ければそのうちどうにかなるだろうという消極的楽観論が限界を迎えたかのような感じだった。

児童相談所に対してどんな態度で臨むか、異論を唱えて取り戻すべきかなど、一時保護になった体験と対処について書かれたブログなどを調べてそれなりに考えたつもりだった。しかし、結果として、ほぼ言われるがままで帰ってきてしまったという敗北感が篤人の気持ちを暗くさせていた。

ネットにあった情報と、自分の場合はどこまで共通しているのか、それを照らし合わせて考えようにも、とりかかるのに躊躇してしまう。目の前には仕事の締め切りが今週中2つと来週に1つ、まだ何も手をつけていない、このところのペースを考慮するに、少しでもとっかかりの下書きしないとかなり厳しいスケジュールになる。

でも児相とは約束をしてしまった。何を優先すればいいのか、考えはまとまらない。そうしているうちにやっていることといえば再度のスケジュール確認、今日何回目だ、何も進まないのに時間だけが過ぎていく。

保育園の送り迎えや食事の用意などの家事全般、十分というほどできてはいなかったにせよ、その他もろもろの豊関係のやるべきことがなくなったのは負担が減ったはずなのに、それによって楽になった心持がしないのは何故なのかと考えても答えは出なかった。

そんな状態のまま児相の家庭訪問日が来た。日程変更の電話をすればよかったのかもしれないが、日程をスケジュールに書き込んでいなかったのが、篤人の意識にそもそもその行動につながるきっかけはなかった。

三島という若い男の職員と佐伯が、「おじゃまします」と部屋に入ってくる。口には出さないが、このままではちょっと問題ありだという印象を持っているのを見てとれる。片付けが大変であれば、手を貸してくれるひとり親家庭向けの家事援助サービスがあるとパンフレットを見せられたが、こんな状態で何を頼めばいいのかという思いの篤人によってそのままテーブルに散乱している書類の山の一番上に乗せられただけだった。

佐伯が一時保護所での豊の様子について説明し、次回面談の日程を確認した。明後日の

日付だったが、それも篤人は覚えていなかった。パソコンの前のメモ帳に書き付ける。

2人が帰った後、篤人は「今日ちょうどゴミ収集日ですから」と三島が外へ出していいかと聞いて外廊下に置いていった可燃ごみの袋をなんとかしなければと動き出した。それを両手に4つ持ち、マンション下の集積所へ納めた。しかし、再度往復する気になれず、運びきれなかったゴミ袋をまた部屋に戻した。

次の面談日、児童相談所の相談室に前回と同じ顔ぶれが揃った。豊は一時保護所では落ち着いて生活できており、身の回りのことをしっかりできることや、同年代の子との遊びの場面でも相手のことを思いやる様子があるといったことなどが佐伯から伝えられた。

篤人の片付けに関してはほとんど何も進んでいなかったが、少しずつできる範囲でやっていると言水増しして説明した。無理をしては意味がないので少しずつでいいと思いますと佐伯は言ったが、篤人としては状況の改善が進んでいないことを認めたような気持ちになった。

そして前回に続く形で豊の家での様子や篤人がどう対応しているかなどのお話をした。河原は篤人が勤めから自宅での仕事に変え、子育ての関わりをより深くしようと考えてきたことにより豊といい関係を築けていることや、今回より以前の病院受診などの対応には安心できる印象を受けると言い、篤人の責任感の強さや思いについては不安になるところはないと述べた。

しかし現実には手が回らなかつたり、体の調子などの問題で十分に対応できていない部分もあるのではという指摘は篤人も認めるざるを得なかった。だから帰せないということになるのかと聞くと、できている部分とできていない部分をきちんと区別すれば、どうしたらいいのかが見えてくる、それがこの話し合いの目的とのことだった。

必要な対策としては、豊にとっての安全・安心度を高めていく仕組みを作ること。具体的には今の家庭内で弱い部分はどこで、それをどう改善したりサポートを受けられるようにしていくかを考えていくことが大きな方向性となると河原が伝え、今後の方針の共通認識とした。

お昼近くになって面談を終え、出口へ向かって相談室の扉が並ぶ廊下を歩きながら世間話的に河原が篤人に話題を振った。

「安田さん、お仕事ではどんな分野のものを主に書きになるんですか」

「何でも書きますよ、えり好みできるような立場じゃないんで」

「もともとソフトウェア業界にいらしたんですね、その関係の雑誌なんかにも？」

「小さな記事で、ときどきはありますが」

「私もA社の雑誌読んでましてね、ひょっとしたらどこかで拝見しているかもしれませんね」

「はあ……、どうでしょうかね……」

篤人の視線は足先を向いたまま、上がる気配はない。

「今日はお昼時にすいませんでした。あ、よかったら向かいの喫茶店のランチがそこそこいけますよ」

「はあ……」

「私もちょくちょく行ってましてね、珍しく昼時もタバコが吸える店なんですよ」

「いえ、吸いませんで」

「そうですか」

エレベーターの扉が開いた。篤人が乗り込んで内部のボタンを押すが、その動作は内壁の手すりにもたれかかりながらのようで危なげに見える。河原と佐伯は受けた印象を表情には出さず、会釈して見送った。

事務所のある3階への階段を上り、自席に戻った佐伯が話を振る。

「こないだもですけど、階段使う様子がなかったですね」

「ああ、すぐ横の階段が見えんわけでもないだろうにな」

築年数のかなり立っている児童相談所の庁舎の階段は古びた手すりしかなく、非常階段のような雰囲気だが、2階分を降りるのにエレベーターを使う来客ばかりではないのも確かだ。

「仕事で徹夜したから疲れてる、ってレベルじゃない慢性的なフラフラ感がありますね、ガス欠気味というか」

「口臭も結構だったなあ、非喫煙者のわりに」

話し合いには前向きな面も見られ、こちらを一方的に非難したりといったこともない。元の生活を取り戻すために何とか気持ちで踏みとどまっているようだが、傍目にも調子は日々低下しているように見える。緊張の糸が切れたらどうなるか、佐伯は篤人に危うさを感じずにはいられなかった。

「安田豊に関する援助方針会議」

<経緯>

5月10日、保育園にて後頭部にあざがあるのを担任が発見し通報。

保育園での児童の状況調査の結果、受傷状況が不明であること、長期の欠席の後の登園であること、児童の養育環境に変化が生じていることなどから一時保護を実施。

翌日、保護者である父と児童相談所において面談、身体的虐待については不明だがネグレクトの懸念あり。帰宅に向けて児童の養育環境の整備を確認することを保護者了承。

5月14日家庭訪問、5月16日第二回の面談を実施。

<一時保護所での行動観察>

20人定員のところに18人目として入所。異年齢の集団とは離れ、同年代の児童とともに職員について遊ぶことが多い、女性職員に甘える様子も見られる。保育園に行きたいと訴える。通報のあったあざについては本人いわく食卓の椅子から落ちて打ったとのこと。それ以外のあざなどは確認されず、父について否定的な言動はない。生活習慣は年齢相応に身についている。

<家族暦・生育暦>

児童は夫婦の第一子。母の実家とは疎遠、父の実家には定期的に帰省をしているが、年1回程度、母があまり父方実家に馴染めなかった模様。ほぼ家族3人での生活。児童の発達に大きな問題なし。

母は母子家庭に育ち兄弟なし、高校卒業後就職で地元を離れる。その就職先は数年で退職、派遣社員として就労した先で夫と出会い、その後結婚。4年後に豊を出産。産後うつと見られる状態の回復が思わしくなく、A市家庭児童相談室がネグレクト疑いで関わり、保健師の訪問から保育園利用につながった。昨年11月ごろから父子と別居し、1月に死亡(自殺)。

父は両親と4歳年上の兄の4人家族。大学卒業後就職したソフトウェア会社で妻と知り合う。保育園入園の翌年に退職し、フリーライターとなる。妻の死亡後は父子で生活。

<課題>

母死亡後の父一人での養育は限界に近づいている。責任感はある、改善の意思がないわけではないが食事・入浴なども手の足りなさが目立つ。支援者となる親族は近隣におらず、父も積極的に頼ることをしていない。頼れる友人知人もいない。

児童の安全確認は保育園の登園が滞りがちのため十分でない、モニタリング機能が不足。家庭内の衛生状態も改善が必要、父の体調不良と精神面での落ち込みも見られ、父自身の生活への支援、治療あるいは必要な状況と思われる。

家庭訪問と2回目までの面接での様子を踏まえ、所全体の会議において安田家の対応について概要説明が行われた。豊よりも篤人側の課題解決が中心となるとの判断で、篤人の苦勞を受け止め、意向を確かめながら養育を支援する資源を増やしてゆくことが当面の方針として定められた。具体的には児童相談所の関わりに対する反応を見ながら、市の相談員・民生委員・保育園などの見守りできる関係先との関係の構築を支援していくことが援助方針として決まった。

会議を終え、これからの対応について河原、佐伯、平田で検討に入る。

「食事関係の話が弾まないのは食欲なしというか食べる気力がないって感じだし、睡眠は不規則で不足気味、かなりうつ的な印象を受けるなあ」

河原が面接の様子を思い出し、素人ながら分析するように、会議の中でも父の状態の把握が鍵になること、最近のエピソードから推測するに、治療へのきっかけを作らなければならぬ段階ではないかとの懸念が示された。

「少なくともその傾向はあると思えるのだが、メンタルの通院ってのは本人がその方向で動かないことにはなあ。家族から勧めてもらうのがいいんだろうが、心配するほど近くで様子を見ている存在もないと来てるし」

「フリーランスの弱さですかね、会社にいたら周囲が気づいてもくれるんでしょうけど」
佐伯も児童相談所での激務をこなす中、メンタルの不調から篤人のような状態になる職員はたびたび見てきた。

「自主的に定期的な健康診断も受けてないのかもしれないね」

「そういう今までと違う行動をするのにも相談相手がいない感じだしねえ。親族や知人関係のつながりも薄くて、まだ本人の状態は緊急度がひどく高いとまでは言えないし、こっからアプローチをしたらかえって拒否的になるかもしれないなあ」

「一般論として勧めるのもいらぬお節介と取られかねませんからね」

「健康面の話はデリケートな問題だからなあ、中年太りの自虐話はできても、メンタルはちょっと触れられんよ」

今後の進め方における問題は、関わりの開始から現在までの篤人側の改善スピードが遅い、というかほぼ進展がないこと。短期での改善が見込めないのであれば、一時保護も長期化せざるを得ないと想定された。

「保護所での様子はどうなの？」

「あ、小泉さんいますね。ちょっと教えてもらいましょう」

豊の担当の児童心理士が席に居るのを見つけ、佐伯が声をかけると河原らのいる一角に椅子ごと来て輪に入ってくれた。新規採用されて4年目、30歳手前の小柄な女性職員は豊が入所した2日目から一時保護所に通ってくれている。

彼女によれば保護所での行動は大きな問題はみられず、家庭内での親からの対処において虐待を疑われるような様子はみられないとのことだった。しかしながら慣れない場所での生活ということもあり、夜中に起きて職員にずっと抱きついていたり、食事がなかなか進まないこともあったという。それでも次第に落ち着いてきており、小泉に対して

「次はいつ来るの」と期待する態度を示したり、「ここのご飯はおいしい」「お風呂にみんなで入るのは楽しい」など、職員に手をかけてかわかってもらうことには嬉しそうな様子も見られるらしい。今一番したいことは、父のいる家に帰って保育園に行きたいということだった。

「息抜きを考えてあげないとですね、面会もなしにあそこにずっといるんじゃないでしょうか」

小泉から伝えられた豊の希望に対し、佐伯は次に一時保護所に行く前に、豊が保育園に外出と言う形で行けるようにするために園と調整することにした。篤人からの面会の申し出はないが、こちらから働きかけを行うことも検討すべきかと考えた。この報告を聞く限り、やはり問題は篤人の側に多くあるかと思わざるを得なかった。

「父親に何かきっかけがないと、改善のほうへの方向転換はされないように思えますね、いかんせんエネルギーが不足気味ですからね」

「自分持ちの養育資源がないうえに、外部からの刺激もほとんどない、生活が変わっていくようなイベントが起き得ないんだよなあ」

「こっちから数打ちあたるで、提案や関わりを続けるしかないですかね」

往々にしてこういった場合は待ちの姿勢になってしまうが、豊にとってそれは家庭を離れる期間が長期化することを意味しており、望ましいことではない。どのようなアプローチが考えられるかを話し合うために、まずは安田家の関係者による検討会議を持つ方針が決められた。

しかし、その動きの最中、意外な場所で変化のきっかけは発生した。全体会議の3日後、ここ児童相談所内で。

< 第4章 転がり落ちたもの >

「……………さん、安田さん！ 大丈夫ですか！」

佐伯と篤人のいる相談室から大声がもれている。ほんの10分前に面談は始まったばかりのはずだ。受付で別の相談者の到着を待っていた河原は咄嗟に走り出し、一気にドアを開けた。

「どうした?!」

篤人がソファからずり落ち、テーブルとの間に倒れこんでいる。

その横にかがみこんで声をかけていた佐伯が緊迫したトーンで叫び返す。

「班長！ 先生呼んでください、これ、どう見てもただの体調不良とかじゃないですよ！」

「わかった！」

河原は壁のインターフォンを取りかけたがまどろっこしいとばかりに部屋の外へ出て叫ぶ。

「相談室1に先生呼んで！ 急いで！」

受付スタッフが「わかりました」と遠くで反応したのを確認し、佐伯と篤人に向き直る。

佐伯が慌しく経過を説明する。普段は歳のわりにベテランの風格すら漂う雰囲気は失せ、動揺を隠せないでいる。

「今までで一番体調が悪そうで、ぼんやりしていたんですが、ちょっと話がかみ合わないなと思ったら、それつが回らない感じになって、それでそのうちに俯いたままになって倒れこんだんです」

「倒れたときに頭は打ったか？」

「いえ、ゆっくりずり落ちた感じだったので、それは……」

「どうしました!?!」

足音とともに児童相談所嘱託医の成岡先生が飛び込んできた。

佐伯が先ほど河原に行った状況説明を倍速気味に繰り返す。

先生が篤人に近づいて呼びかけ、状態を確認する。顔をしかめ、一緒に廊下を走ってきた受付スタッフに叫ぶ。

「救急車呼んで！」

「はいっ！」

成岡の声の鋭さが空気がさらに張り詰めさせる。暴れる相談者をめぐるトラブルよりもより緊迫感の高い、何が起きているのか、どうなるのかわからない雰囲気に佐伯はのまわっていた。続けて篤人についていくつか質問を受け、聞かれるままに必死に答えていたところ次なる指示がとんだ。

「それと、誰か下の自販機でファンタグレープ買ってきて、超特急で！」

「私が行きます！」

唐突にも思えるオーダーに河原が走り出す。

「あと、この人の生活歴に関する記録があったら救急隊員に説明できるよう、簡単にまとめてください」

佐伯は事務室へ走り、豊の記録ファイルの一部を急いでコピーし、個人情報にからむ部分を黒塗りしたうえでホチキスどめをした。

しばらくして救急車が到着し、総合病院に緊急搬送されることになった篤人には、直前の状況を知っている佐伯が付き添うこととなった。篤人は今までになくちょっとした大きさのバッグを持っていたのでそれも携えて救急車に乗った。

救急外来での処置が終わり、追加の検査に入った篤人と離れた後、児童相談所に残った河原にひとまずの報告を入れた時点で通常の勤務時間は終了する時刻だった。結果的に入院となったために必要な手続きをこなし、やっと児童相談所に戻ってきたときにはすでに夜の帳は下りていた。

午後の予定は全てキャンセルをせざるを得なかったこともあり、デスクに乗った佐伯のノートパソコンを覆い尽くすように「至急連絡下さい」「今日中に折り返し電話を」という伝言メモが貼り付けられている。しかし、これら进行处理するよりもまずは顛末の報告をしなければ、と河原のもとへ赴いた。

「今日は面談の最初からちょっと大丈夫かな、と心配な感じはしたんですが……」

佐伯は改めてひととおりの面談開始からの状況を説明した。豊の一時保護所での生活の様子を伝えた後、家庭復帰の見通しなどを確認していたところ、やりとりがちぐはぐになっていき、そのうちにあの状態になったという流れだった。

ごくろうさんと河原がねぎらう。

「先生のいる日の面談にしておいて結果的に幸運だったな、本来の意図とは違ったけど」

話の流れ次第で精神科医の成岡先生と篤人との面談をとも考えていたのだ。

「ええ、でもびっくりしましたよ。目の前で人が倒れるとどうにもできないもんですね」

一般の公務員がそうそう出くわさないであろう、それなりの修羅場をくぐってきたと自負していた佐伯にとっても、人の命の危機を感じる瞬間は手に余るものだった。

「ファンタについても知識じゃ持ってたんだけどなあ、俺も実際には自分じゃ動けんかったわ」

ダッシュでファンタグレープを買いに走った河原の行動を理解できなかった佐伯だったが、低血糖症と思われる症状が出ている人にはブドウ糖の摂取が有効で、ファンタグレープはブドウ糖液の代用品として広く知られているとのことだった。

「今日に今日でわからんだろうけど、見通しはどうだい？」

「これからの検査の結果次第ですが、その他の疾患が見つければ長期の入院ということもありうるという話でした」

「今はいい方向になるよう祈るしかないわな。逆に悪いところが見つかって、この機会に直しとくのがかえっていいのかもしれない」

騒動はひと段落した。しかし篤人の状態と今後の推移によっては前回会議で検討したもう一つの方針、一時保護が長期化した場合に想定される措置を少し早めに実施することになると思われた。

< 今後の方針 >

一時保護の継続が必要な場合は養育里親への一時保護委託に切り替え、養育環境の調整が長期化することを想定し、養育里親への委託も視野に入れた生活場所の選定を進める。養育里親の選定にあたっては、生活環境の変化をなるべく抑えることと、就学時期を来年に控えている児童の地域との関わりを維持するため、家庭と同学区に居住する渡辺里親を候補とする。

「里親の打診は平田に頼んである。反応がよければ早めに切り替えの段取りをつけたいな」「ですね、親側の状況改善は一旦ストップになるわけですし、養育環境の整備は長期戦になりそうですから、その間の豊くんの生活環境の確保を急がないと」

篤人に対し同情する点はあるが、何よりも佐伯たちが考えるのは子どもの環境だ。疲れを理由に先送りはできない。夜間対応は連日のことだが、山となったデスクの上の処理事項を片付けるべく、自席に腰を下ろすと佐伯は買い置き栄養ドリンクを気合を入れるようにあおった。

見慣れない窓の向こうは暗い。

児童相談所で話をしているうちに頭痛が強くなり、冷や汗が出てちょっと横になりたいと思っているうちに頭がぼんやりとする感じがしたところまではなんとなく覚えている。その後はいろいろな声が出て、何かに乗せられて……。ぼんやりしたままあれこれと何かをされたような覚えがあった。今はカーテンに囲まれた見慣れぬベッドの上に横たわっている。

先ほどまで看護師と一緒にベッドの脇にいたのは児童相談所で話をしていた佐伯だった。自分は救急車で搬送され、検査のため入院となったとのことで、明日以降も検査があるという。必要な手続きは佐伯がある程度代行してくれたい。入院なんて大げさなの思いもぼんやりとはあったが、体も頭もすっきりとせず、されるがままに任せてしまうしかないかというところまでしか考えは続かなかつた。ひどい疲れを感じ、意識は再びぼんやりとしてきた。まるで夢の中にいるかのような感覚だった。

再び意識がはっきりしたとき、状況は何も変わっていなかった。夢ではないのだ。

「何をやっているんだ……」

情けなさで涙がこぼれる。何を言われても、何も言わせないためにも一人でやりきるんじゃないか。これからどうするんだ、仕事も、豊のことも。

昨日、愕然とする出来事があった。思考を伴う文章がまともに書けなくなっていたのだ。気力をしばって書き続けたものが全く文章の体を成していない。直すために何度も読み返している、今度は文章自体が頭に入らなくなってしまった。

一時的な疲れかと思って休憩し、2時間経っても状態は変わらなかった。そのまま眠れず面談に行き、その結果がこのさまだ。

「俺はどうなってしまっただろう……」

呆然として無機質な天井を見上げる。何とかしなければならぬ、なのに体も頭も言うことをきかない。そこには無様に震えている中年男が横たわっているだけだった。

篤人と家族にとっての最初のつまづきはささいなこと、小さなアクシデントとして乗り越えるはずだった。けれど、順調に見えた日々の突然の終わりまでの道のりは、そこからずつつながっていたことなのだろうと今にして思う。

篤人が前職である会社に入って3年目、派遣社員として同じ部署に入って来た2歳年下の真理子と出会った。最初は仕事上の関わりが多いというくらいだったが、その仕事に対する真面目さが目立っていた。休みの日に電話をしてきて何かと思ったら「明日の処理でわからないことがある。朝一番で忙しい時間だと聞けないので、時間のロスをしないように今教えてもらいたい」ということがあったくらい、いつでも仕事のことを忘れない、少し不器用さを感じるが、好ましさを抱ける真面目さが自分とどこか似ていると思い、好感を持ったのが特別に意識するきっかけだった。

その後、篤人のほうからアプローチをかけたが、「あたしと付き合っても楽しくないですよ」という物言いで最初はやんわりと断られた。しかしその後も周囲の目や噂話も我聞せずという感じの接し方を続け、生涯最高と思える粘り腰でついに付き合い始めることにこぎつけた。

「周りは完全に篤人が真理子ちゃんを好きなのはわかってたけど、それでもえこひいきとかいう感じじゃなくて、微笑ましい感じで献身的なフォローとかをしてたからうまくいってほしいなってみんな応援してました」

交際3年目で結婚を決め、結婚式は挙げなかったが、知人や友人を集めたパーティーをした。そこで2人のなれそめについて司会者のインタビューに答えた職場の友人が語った

2人の関係は真理子にとっても決して悪い印象のものではなかった。「でもね、私、恋愛だけじゃなく、人間関係があまりうまくできないと思ってたの。前の仕事もそっちの関係で気まずくなって辞めた面があったから、できるだけ仕事上のつきあいだけに留めようって考えで断り続けたのよね」

パーティーでの簡単なスピーチの打ち合わせの中で真理子は当時のことについてそう打ち明けた。

「でも、何度断ってもひるまなかったね。それどころか、その翌日の仕事上でも何のしりもないかのように優しくしてくれて、何ていうか、この人はどこまで私に労力を注ぎ込むつもりなんだろうって、何の見返りもないのに。でも、そこまでしてくれる気持ちに心える自信が正直無くて、嬉しいんだけどその対象が自分でいいのかなって思っただけ。けど、そのおかげでだんだん自分自身の職場での緊張とかがなくなって、周りの人たちとの関係もいい感じになっていったんだ。前みたいなやめ方はしたくない、頑張ろうっていう必死な態度や気持ちが次第にほぐされていったって感じだったなあ」

照れくさそうに、けれども大事な思い出を反芻するように話す真理子を見て、篤人もまた幸せな気分になった。

結婚して4年目、豊を妊娠したとき、真理子の喜びは大きなものだったと記憶している。出産準備のための買い物など、嬉々としてあちこちへ出かけていたし、「結婚も幸せだったけど、これからもっと幸せになるんだね」と笑顔で話していたことを今でも覚えている。篤人もそんな真理子の微笑ましい言動に嬉しさを感じていた。

母子家庭で育ち、その母親との関係もあまりよくなかったと言っており、実際に結婚の話が出てからも式や挨拶について話をして拒否するような対応をされし、その後ほとんど行き来はなかった。それ以外にも様々な要因があるのだろうが、自己評価が低いように思われ、がんばりすぎるくらいにがんばっているのが常だった。それが母親になるということに関しては素直に喜んでいて、そのことに篤人も安心というかよかったなという思いでいた。

しかし、出産が近づくにつれ、真理子の不安な気持ちは高まっていった。疎遠な母は頼れず、近くに親しい友人がいないこともあり、篤人としてはできる限り話を聞いたり、自分の母や友人にどう接したらいいかなどアドバイスを求めたりしていた。派遣の仕事をやめることも、出産以外のことにわずらわされないほうがいいのではと2人で話し合っただけだった。

幸い、出産は大きな問題もなく無事終わった。産後は始めての子育てということで篤人ともども大変な日々であったが、忙しさに追われているうちに、「悩むよりも手を動かしているのが良かったのかも」と次第に真理子の気持ちは上向いた様子だった。

そんな日々の中、篤人にとって小さな不安が生じた。豊が3歳になる頃、篤人の母に軽い認知症の傾向があったため、篤人がたびたび実家へ行くことになったのだ。なるべく早くに戻るつもりが長引くこともあり、そのうち実家から戻るたびに少し真理子の様子に違和感を覚えるようになった。

このとき真理子は口には出さなかったが、後になって思えば、つながりの深い実家のある篤人と自分との境遇の差を感じていたのではないだろうか。篤人の実家が少し遠方ということもあり、それまではさほど頻繁には帰省はしていなかったし、家族3人で帰省というのも年1回がせいぜいだった。夫の実家ということで気疲れもあるだろうという配慮のつもりだったが、かえってそれが疎外感を感じさせていたのかもしれない。

そんな思いで豊と2人きりでいる時間が、真理子が不調をきたした一つの要因かもしれない。ぼんやりとしていて、ときどき予定を忘れることがあり、市から通知の来ていた3歳児検診に行くのもすっかり忘れていた。再度の通知もあったようなのだが、それにも気づかなかつたためか、市から保健師の家庭訪問があった。訪問した保健師からの勧めで近くの保育園に併設されている子育て支援センターでの行事に参加してみたところ、楽しそうに遊ぶ子どもたちの姿を見て、豊を保育園に入園させようかという気持ちになり、少しずつ仕事を始めようかと思うと相談があった。

篤人としても、自分の仕事は家の中でずっと2人であることが真理子の気持がふさぐ原因なのかとも思い、それに賛成した。以前の派遣会社に登録し、仕事を始める予定で翌年の入園申し込みをした。派遣先はすぐには決まらなかったが、豊が保育園に慣れた頃にある程度長期の派遣先が確定した。

仕事と育児の両立はどこの家庭でも永遠のテーマであろうが、篤人も協力し、なんとか日々は過ぎていった。その翌年、篤人は会社をやめてフリーライターになった。会社の業務体制の変化に思うところがあったというのが大きな理由だが、なるべく家庭内での真理子の負担を減らせばという思いもその一因だった。派遣の仕事は残業もあり、家事や育児が篤人の負担になる部分が増えたことについて、篤人は「できるほうがやればいいよ」と伝えていた。

新しい家庭内の体制の滑り出しは順調に見えたが、豊が年中クラスに上がった年に再び真理子の調子がぶり返すように悪化した。風邪のような症状がなかなか治らず、寝込むことが多くなり、朝もすっきりと起きられずに仕事に行くことがほぼできなくなった。そのうち家のことどころか、自分のことすら満足にできないと泣くことが多くなっていった。篤人は真理子がいてくれるだけで十分幸せだと慰め続けたが、「きっと元気になって恩返しするから、今はごめん」と真理子は自分を責めるように謝るばかりだった。

何が原因だったのかは、今となってはもはや確認するすべもないが、崩れたバランスはなかなか回復しなかった。そんな調子で夏が過ぎ、木々の葉の色が変わる頃、「ちょっと

ずつ良くなってきたと思うから、じっくりと直すっていうか、気分を落ち着けるために昔の友人や知人のいる地元で過ごしてみようと思うんだけど……」という真理子からの提案があった。久しぶりに前向きに思える発言だったので、篤人も賛成した。体調そのものは安心できる水準にはまだ遠いと感じたが、回復に向けて調子が上向いているからそういった気持ちになったのだと思えたからでもあった。

しかし、地元へ戻ってからわずか2ヶ月後の年明けに真理子が遺体で発見されたとの連絡が警察から入った。警察での事情聴取で自殺とみられると聞かされた。

その後は旅先での突然死だったという嘘を関係者全員につき通し、慌しく遺影の用意もできないまま、真理子の地元で家族だけでの葬儀を終えた。

真理子の母は特に手も口も出さずにいたが、それ心配りなのか薄情なのか判断する気も起きなかった。おそらくはこれっきりになるだろう謝辞を述べ、手元供養とすることにした遺骨とともにマンションへ戻った。

濃密な空虚さの詰まった、狭くて広い、からっぽな部屋。骨壺を前に篤人は昔何かで読んだ短いフレーズを口に出した。

「事実は存在しない、ただ解釈だけが存在する」

どんな現象が起きたとしても、それに意味を持たせるのは自分の受け止め方次第、全ての人が絶望する事実など存在しない。仕事や人生の困難に付きあたる度に幾度も勇気付けられたその言葉はこのときも篤人の支えとなった。

そんな状況で、篤人は奮闘した。やらなければならないことは山ほどあり、それにかまけているうちに全ては落ち着くところへ落ち着くだろう、今までだって何とかしてきたのだからと考えながら、けれどそれは破綻の始まりでもあった。

誰かが部屋の中を覗いていれば、数々の変化に気づいただろう。しかし、そんな外部の目も、それに対する助けも篤人は持ち得ていなかったし、求めてもいなかった。

食事の内容や量、頻度。仕事への意欲、成果物の質の低下、作業スピードの鈍化、行き詰まり。育児の様子、親子でのひきこもり。広がっていく片付かない空間。篤人自身の体調の悪化、新しいことへの処理能力と意欲の低下。何をしていたのか分からない空白の時間。

その果てに、あの一時保護の日はやって来たのだった。

< 第5章 風はどこから >

篤人が入院した翌週の月曜、児童相談所に一人の女性が訪れた。渡辺孝子という名前を聞いてすぐに顔が浮かんだため、佐伯は昨日電話をかけた平田と共にロビーへ向かった。

「ご無沙汰してます渡辺さん、なかなか里親会の行事にもお伺いできませんで」

「そんな、お忙しいことはあちこちで耳にしていますので、お気になさらずに」

頭を下げる佐伯を制するように「いえいえ」といった感じで手を振る女性が渡辺孝子だ。羽織っているライトイエローのカーディガンそのままの明るい雰囲気を持つ、A市在住の養育里親であり、里親の団体である里親会の役員も務めている。以前にも佐伯が関わった家庭の児童を自宅に迎えて養育したことがあり、それをきっかけに佐伯は直接の里親業務担当ではないのだが、里親会などに関わりを持っている。

挨拶もそこそこに相談室へ移動し、今回の案件についてひととおりの説明をした。すると孝子は微塵の迷いも感じさせずにこう申し出た。

「わかりました、まずは豊くんに会わせていただけますか」

新たに児童を養育するとき、多くの方は慎重に検討を重ねてから回答をとということが多い(むしろそれは当然かつ自然なことなのだが)。いい意味で予想を裏切る即答、この器の大きさを感じさせる対応に甘えてはいけなそうと思いつつ、つい頼ることが多くなってしまう。

「あの、お答えは何も今すぐにといいわけでは……」

平田が焦った様子でその言葉に応じたが、「心配御無用」とばかりに孝子はそれを受け流して話を進める。普通ならご家族とご相談のうえというように話を持ち帰ってもらうところなのだが、そのあたりはすでに先週の平田の概略説明で家庭内の同意は得てきたとのことだった。正直、あまり時間をかけられないという事情もあるため、佐伯は平田にこの流れに乗ろうと促した。

「では、豊くんは今一時保護所にいますので、向こうの予定を確認して児童相談所で……」

佐伯が面会の段取りを説明しようとする、それにも孝子から提案が入った。

「大人の都合であちこち連れまわすのもかわいそうでしょう。そこへ行ってもいいなら私が行きますよ」

一つ一つがあくまで自分の都合ではなく、子どものことを考えてということが伝わってくる。いかに児童相談所が無意識に大人の都合で動いているか、それを反省しなければという思いになる。

「あまり一般の人が入れないって制限があるなら、里親研修の一環の施設見学って名目ならどうです？ まだ行ったことないんですよ、新しくなった一時保護所は」

「いえ、大丈夫です、一時保護所には面談のための来所もありますので」

佐伯はもちろん施設見学もかまわないと付け加えた。この人の頭の回転の速さには頼もしさとともに自分の至らなさも時折感じるが、それもよい発奮材料にもなっている。

「それでは、段取りします。すいません、突然のお話なのに」

「慣れてますよ、いつも突然ですからね」

「まことにすいません……」

「あ、いいえ、そんな、あの、児童相談所さんの連絡が突然ってことじゃなくって、子ども一時保護とかがいつ起きるかわからないって意味ですから」

孝子が大きく両手を胸の前でを振り、謝らせてばかりになってしまった平田にフォローを入れる。

「今回いただいた連絡はかなり早いものですよ」

「はあ、恐縮です」

そう言い残して平田は一時保護所との連絡のため中座した。孝子と話しているといつもあちらのペースに引つ張られる。しかしそれは決して気分の悪いものではない。

「あの、まだ正式な保護者の同意は得られていないので、確実に委託になるかは……」

佐伯は篤人の意向を確認していないという懸念を伝えたが、これまた意に介さずといった感じで孝子は答える。関わりの長い佐伯だけと話しているため、口調はくだけたものに変わっている。

「同意が得られなくて施設に行ったとしても、親御さんが対応できないお休みの季節里親候補にはなれるでしょ」

施設入所中でも、夏休みや年末年始になら期間限定で家庭に戻れる子どももいる。けれど家庭の都合で家に戻れない子どもは施設に残ることになる、そんな子どもをその期間だけ受け入れるのが季節里親で、孝子もその経験がある。

「なれるときに顔見知りになっておいて損はないでしょ。ご近所さんというにはちょっと家同士は距離があるけどね」

その後、佐伯と平田と共に一時保護所へ訪問し、施設の見学と豊との面談を終えた孝子は、「あの子にとっていい結果になることを祈ってますね」と言って帰っていった。

「なんか、すごくエネルギーのある人ですね」

事務所に戻ると平田が感心しきった声を出した。

「2人のお子さんが成人したのをきっかけに里親になってまだ7年だけど、あのとおりの存在感ですっかり里親会でも頼りにされる存在になってるわね」

「電話したときの声の印象もでしたけど、今日のファッションも実年齢よりかなりお若い

って感じを受けますね」

佐伯もそれは大いに同意する。口には出さないが、特にファッションについては自分の寂しいクローゼットのメンバーにそのセンスの半分でもいいから分けてほしいくらいだ。数字上は背格好に大差はなく、ひとまわりも歳が違うはずだが、「勝てない、勝負しようと思えない」ほどの女としての基礎力の差を感じる。

「普段はご実家の喫茶店を手伝ってるってことなんだけど、チェーン店全盛のこのご時勢に個人の経営であんなにはやっているお店を他には知らないわ」

何度か実際に客としても訪れたことがあるが、気遣いの細やかさや人あたりの柔らかさはその場面でも変わらない。自然な人となりで裏表なく出る人なのだろう。冗談めかして「でも、怒るときは怒りますよ。ストレスだってたまったら発散しますよ、主にダンナ相手に」とコーヒーを乗せてきた木のトレーをバンバン叩きながら笑って語っていた姿が思い出される。

孝子に会うと元気をもらえる。児童相談所で安心感を得られる貴重なひとときだと自分ならずとも感じるのだと佐伯は思った。

(もうどうでもいい、俺には何もできない、してやれない……)

本日予定の検査を終えて横になったまま、堂々巡りになっていた篤人の絶望的な思考は来客によって一時中断された。

カーテン越したが、会話の内容で児童相談所の佐伯がベッドの横にいた看護師に声をかけているのがわかった。

「あの、患者さんの個人情報ちょっと……」

佐伯が篤人の病状などを尋ねているのだろう、看護師が篤人に視線を送ったので、「いいですよ」と声をかける。看護師によれば検査や他の科の受診でもうしばらく入院はかかることだったので、そのあたりは看護師から佐伯に話してもらって構わないと伝えると、「では後で」と佐伯に伝えて病室を出て行った。カーテンが遠慮がちにめくられ、佐伯がベッド横の椅子に座る。

「体調はいかがですか？ お話はしても……」

「いいとは言えないですが、倒れた日よりはましです」

言葉どおりの体調らしく、起き上がることはせず顔だけを横に向けて篤人が答える。

4人部屋だが今は自分以外には1人しかおらず、そのもう一人もベッドにはいないことが多いのでこのままここで話をして構わない。そう告げると佐伯は豊の一時保護所での生活ぶりを話した後、今後のことについて切り出してきた。

「いいですよ、もうどうにもできないです。自分がこんなになったからにはどうせ施設に入れられるんでしょう」

めぐっていた思考の内容がだだらと流れ出すような淡々とした口調で伝えられる。

「それも一つの案ですが、里親という選択肢があります。一時保護所での生活を続けるのでも施設でもない 養育里親という手段があるんです」

「里親？」

その聞きなれない単語は篤人にとってあまりに唐突に感じられた。里親というと、生まれた犬や猫をもらってくれる人を探すポスターに書かれているフレーズ、そんな認識だった。

「あまり広くは知られていないんですが、里親というのは一般のご家庭で、何らかの事情でお家にいられない豊くんのようなお子さんと生活を共にする方のことです」

「ちょっと待ってください、そういう人はみなし子とかを養子にするのが目的じゃないんですか？」

児童相談所は豊を養子に出せと言っているのか？ 固くなった篤人の表情からそんな心配の意図を感じ取ったのか、佐伯がさらに説明を続ける。

「いえ、おっしゃるような養子縁組を望んでお子さんを迎える里親もいますが、そうではなくて、期間限定でお家に帰れるまでの間だけお預かりする里親もいて、それを養育里親というんです。今回のお話は、養子縁組は想定していません。豊くんには安田さんがいらっしゃるんですから、養子縁組とかは必要ないんです」

「……養子に出せという話ではないんですね」

「もちろんです。そんなことは全く考えていません。あくまでお家に帰れるようになるまでの限定的なお預かりのご提案です」

佐伯は施設に入る場合と里親に預ける場合のメリットデメリットを一般的な例と断ったうえでさらに詳細な説明をした。

篤人は「家にいられない子は施設に入る」というものだと考えていたが、最近では変化してきているとのことだった。原則的には子どもにとってそれまで暮らしていた環境になるべく近い状態を保障することが求められているという。住まいの形としては施設という大きな建物の中ではなくどこにでもある一般の住宅での生活。大人数の子どもで過ごす集団生活ではなく、一組の夫婦と子どもという人間関係。それまでの生活圏で培った、子どもの持っている地域との物理的及び心理的つながりを断ち切らないこと。それらを提供するには、里親に預けることが望ましいとされているのが最近の動向だという。

豊は今まで篤人と家で問題なく暮らしていたわけで、あえて施設での生活が必要と判断される理由はないこと。施設はA市にはなく、隣のB市にあるものが一番近いが、現在空きがないため、もっと遠方に行くことにならざるを得ないこと。

そのため、預け先として検討している里親は同じA市にいて、豊が今までと同じ保育園

に通い続けることも可能な距離に住居があること。今までにも同じように期間限定で預かった子を家庭に帰した実績があること。

佐伯の説明が一段落すると、篤人はさらに細かなことについて尋ねた。

「その里親の家には外には子どもはいないんですか？ その家の子と差別されるなんてことがあるんじゃないですか？」

「お話した里親さんのお子さんはもう成人していて、ご心配されるような状況はありません。それにそもそもそういった懸念があるような方にお子さんを預けることは児童相談所はしません」

「以前にとりあえず2週間を目処にとの話をしていたはずですが、その期限はもう過ぎていますよね。私の状態がこういうことになっているから、里親に預けるか施設に入るかを決めなくてはならないんですか？」

「今の豊くんは一時保護というお預かりの状態、その場所を変えるだけです。今後の見通しとして一時的というよりも、もっと長くにお預かりする必要があるれば、あらためて長期の預かりについてご説明させていただきます。勝手にずっと里親に預けることを決めることはありません」

「その、ずっと預かるということになる目安は？」

「今はまた安田さん入院されていますので、退院が決まられて、その後、以前お話をしていた帰宅に向けての見通しが見つからないようであれば、そこで長期のお預かりをするかどうかを考えたいと思っています」

篤人の疑問や懸念に佐伯は一つ一つ丁寧に答え続けた。そして、長いやり取りの末、篤人は改めて豊の一時保護先を里親に切り替えることに異存はないと伝えた。篤人の側の事情が長引くようであれば、そのときには改めて話し合いを持つと取り決めをした。

ご理解をいただけてありがたいと述べ、退出しようとした立ち上がりかけた際、篤人がいかにも自然なことだというように言葉を発した。

「退院したら、里親のお宅にいる豊に会いに行きたいです」

佐伯の呼吸が止まり、表情が一瞬で固まった。その言葉は予期していなかったというように全身を緊張させたままおずおずと返事をする。

「それは……、できないことになっています」

「え？」

「安田さんだけではありません、里親に預けている皆さんに同じ対応をさせていただいているんです」

篤人の表情が一変した。不信感に満ちた表情で、視線は力を込めて佐伯をとらえている。「どうしてですか？」

「そういった前例がないんです。面会は児童相談所にお子さんを私たちがお連れして、そこで会ってもらうことになっています」

「何でわざわざそんなことを、何の問題があると言うんですか？」

佐伯は固い動作でゆっくりとベッドの横の椅子に座りなおし、説明する。

里親の家は、里親の家族が暮らすプライベートな空間でもある。そこで公の役割である一時保護やその後の生活をするという特殊性があり、児童相談所がかかわっている以上、預かっている子の親とはいえ、里親と面識がなく、信頼関係のできていない人が自由に立ち入ることは好ましくない。それは里親を守ることであり、里親家庭の生活を守ることも児童相談所の役目なのだ。過去には偶然に里親宅の場所を知り、児童相談所への連絡もなく訪問したうえで、預けていた子どもを強引に連れ出して問題になった事例もある。法に照らして判断すれば、不法侵入や略取誘拐の罪を問われる内容だ。

「安田さんがそういったことをすると決め付けているわけでは決していないんです。でも、一般的なルールとして全ての方に守ってもらっていることをわかっていたいただきたいんです」

「じゃあ……、里親じゃなくて施設だったらいいんですか？」

「施設の場合……、お子さんの生活が落ち着いたら、という条件はありますが、面会にみえる親御さんはいらっしやいます」

「できるということですね」

それはあまり開示したくない事実のようで、佐伯は重い口ぶりで「はい」と答えた。

「だったら施設のほうがいいですよ……」

「でも安田さん、先ほどの説明でおわかりいただけたのではないかと思うのですが、豊くんには里親のほうが望ましいんです」

確かに、施設と里親の環境の比較を聞いたとき、豊にとって望ましいのは里親だと思った。思ったが……しかし、自由に会えないことに納得などできない。そう言いたげに口を真一文字に結んでいる篤人に佐伯が訴える。

「決して安田さんのお気持ちを無視しているわけではありません」

「だったら……」

「けれど、一番大事にしたいのは、豊くんにとっていい環境を整えてあげたいということなんです。今ここにない豊くんが、大人たちの都合だけで自分のことを決められたのではなく、豊くんのことをみんなで一生懸命考えたんだよと言ってあげられるようにしたいんです。その部分では、私たちは同じ思いを持てるんじゃないでしょうか？」

確かに先ほどまでは、里親に預けることを認めるつもりだった。

佐伯の言うように、自分が自由に面会できないということだけでそれをひっくり返すの

は自分のエゴだということもわかる。

児童相談所は可能な限り親子で会える時間を作る支援をする、それが篤人の要望であっても、豊の要望であっても。面会をしなければ篤人と豊の関係は悪くなるのかと言ったらそれは違うのではないか、陳腐な言い方かもしれないが、そんなもろい関係ではないでしょうと佐伯は説得を続けた。

篤人もそれは理屈ではわかるつもりだ、だけど理屈だけでは納得できない。

「今日のところは、一時保護先の変更は同意します……でも、自分が退院できたら、また考えさせてください」

一拍間を置いて、佐伯は頷いた。

「ご連絡お待ちしています。どうぞ、ご無理をなさらないでください」

佐伯は深く頭を下げて部屋を出て行った。

少し先が見えたと思った篤人の心の安らぎは霧散し、こわばった体の内部で不安定な鼓動が再び暴れ出したように感じていた。

< 第6章 ぶつけてみれば >

「……という塩梅でした」
児童相談所に戻り、篤人との面会での様子を聞かれた佐伯は、首尾よくいかなかったという表情で河原に報告した。

「まあ、一足飛びには進まんだらうよ。入院という自身の状況も思考の混乱を生む要素だらうし」

「ある程度は理解してもらえたかなと思ったんですけど……」

「そのある程度がくせ者なんだよな。基本的には冷静で頭のいい人なんらうけど、理屈だけに従って行動するほど非人間的な合理主義者でもないってことだ」

感情的になってけんか腰になるとまではいなくても、常識的な対応という範囲にはおさまってくれない態度というのは対処が難しいものだ。こちらとしても相手の意図をはかりかねるため、どうしても守勢に回らざるを得ない。

「『わかっちゃいるけどやめられない』あるいは『わかっているけどわかるわけにはいかない』っていうのかなあ。極限まで追い込まれた状況になるほど、人は理屈じゃ説明のつかない行動をするもんだよ」

河原はそう語り、退院までは篤人の考えを自身で整理する時間にあててもらうことにして、こちらからのアプローチは少し控えようという方針を決めた。一時保護先の変更については手早く進め、そこででの生活の様子が上々であれば篤人の気持ちもまた揺らくかまないと付け加えて。

佐伯にとっても篤人の抱いた不満はわからないでもない。現実として、里親と保護者が顔を合わせることはほとんどないと言っている。こと日本においては、専門誌の論文で読んだところでは、アメリカには「親も子も丸ごと支援する里親」がいるというが、

社会における里親の位置づけや制度の歴史にもよるのだろうが、日本ではそこまで里親が担うことは実際の役割分担として織り込まれていない。親の対応は児童相談所の役割、というのがほぼ常識となっている。親側の里親に対しての引け目による葛藤や、必要とされる体系的な知識や技法などを持たない里親側の対応の難しさもあるのだろう。何かの偶然であらかじめの知り合いだったとか、おじおばなどの親族が里親になるというような、ごくまれな事例以外では両者の関係性は児童相談所を挟んだ間接的なものにとどまるのが実態だ。行政側のプログラムも未整備なため、佐伯個人に限らず児童相談所全体でもそういった事例はない。

日本でも制度の成熟が進めばこんな苦悩も減るのかな、いつかは。そんな思いを抱きつつ佐伯は孝子に電話を入れた。待ってましたとばかりに電話に出た孝子は、すぐにも豊を迎えに行きたいとのことだった。丁度明日は勤めが休みなのだという。佐伯は気がほんの少しだが軽くなるのを感じた。一時保護所に行くたびに職員から感じる「まだ行き先が決まらないの？」というプレッシャーからはこれで開放される目処が立つからだ。

親や施設などの受け入れ先との調整がなかなか進まないことで、入所している児童の先行きが見えない状態が長引くことが多い。そのため、一時保護所は慢性的に定員いっぱいの状態が続いており、入所している児童たちのストレスは高い。その反発のエネルギーを受け止める職員のストレスも比例して高まるのは自然なことだと理解はできる。ほとんど事前情報のない生身の人間への対応を試行錯誤で模索している最中にも、新たな入所児童は次から次へとやってくる。特に入所が長期化する児童は対応にも苦慮する点が多い傾向があり、不謹慎ながら逆エリートとも呼べるような精鋭集団になってしまうことがある。

けれどその子たちを責めることはできない、このような環境に置かれてるのは親や行政という大人側の体制が不十分なせいだからだ。それを彼らは被害者として精一杯に糾弾しているともいえる。そのむき出しの感情の威力は子どもに向き合う専門職である児童指導員としてのプロ意識をも揺るがし、心をざわつかせるほどだ。しかし、揺り動かされた大人側の感情を一時保護所の内部で子どもにぶつけるわけにはいかない、ゆえに持っているいき所のない負のエネルギーの矛先は佐伯らに向けられことも多々ある。

だから自分の担当する児童がいるときには一時保護所に足を運ぶのは気が重い。けれど、気後れから先延ばしにしていれば、次に行ったときに余計に何を言われるかわかなくなる。豊の様子を確かめるといふ目的もあり、佐伯はそんな思いを抱えつつ車を10分走らせ、保育園とはかなり違った、緊張感を内包した騒がしさを漂わせる建物を訪れた。

外壁は新築されてまだ3年というのがあるが、中に入ると早くも歴戦の古参兵のような傷を追った壁が続く。その向こうにある職員室の雰囲気はライオンの檻に入るかのごとき緊張感を抱かせる。えいやっという気持でこれまたあちこち痛んでいるドアを開け、一時保護所長に豊の里親宅への保護先を変更する方針を説明した。しかし、よほど職員の内にも余裕がないのか「何をのろのろやってんの、今からでもつれて行きなよ！」というように表に感情が漏れてしまうのもわからなくはない、正直わかりたくはないのだが。

はるか昔、新人研修の一環で現在の場所に移る前の年季の入っていた一時保護所で過ごしたことがある。わずかに数日だけの経験でもその空気のピリピリ感は垣間見たが、そのストレスをぶつけられる側が感じるストレスも結構なものだということは、児童相談所の誰もが心の底で感じていることではないだろうか佐伯は思う。ただでさえ虐待事案では児童の親と対立的な関係になりやすい児童相談所としては、協力してことにあたる関係先まで対立関係が生じるのは勘弁してほしいところだが、どこにも相手を気遣うほどの余裕はないのだろうかと帰りの車内でため息が出る。児童相談所境界はどこでも不幸自慢がで

きるような（そして自慢した後でさらに心がどんよりするのだが）厳しい労働環境にある。その改善は誰からも望まれているが、昨今の厳しい財政状況や職員の定着率の悪さなどから年々悪化しているようにすら思えてならなかった。

居心地の悪さを感じつつ、児童の生活スペースへ向かい、豊を探した。同じくらいの年代の児童と一緒に工作をしていたが、佐伯が「お話してもいい？」と声をかけると「早く行こう」と言わんばかりにこちらの手を引いて面談室へ向かっていく。

以前にもう少し上の年代の児童に以前聞いたところでは、一時保護所の児童の中では「誰々の担当はよく来るけど、自分の担当はぜんぜん来ない」というような情報が自然とゆきわたるらしい。あまり顔を出さない児童相談所職員は児童からも信頼がなくなるということだが、それは児童として自分に関わってくれる大人への期待の裏返しでもあるのだと感じる。面談室へ行ける児童はちょっとした優越感を感じるのだろうか、仕切りのドアを抜ける際、他の児童の視線を感じてそう思った。

面談室に入ってソファに並んで座る。まず、篤人が入院していることについてできるだけ不安がらせないように説明をし、続いてこの状況だとお家に誰もいないから、すぐには帰れないことを告げた。その代わり、こことは別の場所になるが、豊が保育園に通えるところに移ることができるのだが、豊ははどうしたいかと訪ね、篤人もそつしたほうがいいと思っていると伝えたとこでしばらく返事を待った。背もたれによりかかって手足を遊ばせるようにぶらぶらと動かしながら豊は足元や佐伯へとちらちら視点を動かす。そして「保育園に行きたい」と答えたので「じゃあ、ちょっとお引越しするけどいいかな？」と尋ねると「いいよ」との反応だったので、準備ができたなら迎えに来ると伝えて面談を終えた。

生活環境をこころろ変えられるのは児童にとって大きな負担だ。こちらとしてはそれが現状における最善と信じ、関係者の間を駆けずり回った結果の提案だが、できるだけ児童にも納得をしてもらいたいし、あなたの気持ちを尊重しているよというメッセージが伝わればと思い、保育園児であっても意思確認と説明を省くことはしない。

「自分のことなのに、何でも勝手に大人に決められて、どうにもできないんだなってあきらめてた」

一時保護を経て児童養護施設へ移りそのまま自立という道を歩んだある高校生の声だ。自分たち大人に対し、過大な期待をしないことで自分を納得させているような口ぶりに、自らの姿勢や児童への向き合い方はどうなのだと強く心を揺さぶられた。直接その声を聞いた佐伯としては、一時保護所から何と言われてもこの段階はきっちり踏んでおきたいところだった。

信念に従って遂行した一時保護所との調整ではあったが、佐伯が一時保護所で投げつけられた言葉によって受けたダメージは大きかった。久々に気分がへこんだため、このままいつもの慢性化した残業をしたところで効率は上がりはしないと判断し、定時で仕事を切り上げた。

「何も予定があるわけじゃないですけど」

そう言って逃げるように事務所を出たが、あえて付け加えるのなら、ちょうど今日は孝子の勤め先兼実家である喫茶店が夜営業をやっている日だということに気づいたことも理由の一つではあった。豊の一時保護先の変更についての打ち合わせは明日以降と孝子にアポを取ったが、仕事とは切り離し、あくまで一個人として、毎日哀愁すら漂うメニュー続きの夕食に潤いを与えたいという願いも抱いて向かった。カウンター席で味わう鮭ときのこの味噌グラタンが胃壁から染みるよう体全体になじみ、エネルギーが充電されるとともに口からは本音がぼるぼるとこぼれていく。

「正直、もういいやって思うこともあるんですけどよ。ほんとに代ってもらえるなら喜んで席を譲りますよ」

長年児童相談所職員とつきあいのある孝子は大まかにではあるが、佐伯たちの苦しい状況は理解してくれていると思う。いろいろと省略している話にもうなずいてくれるので、口調はどんどん軽くなっていく。

「至らないでしょうけど、頑張ってるつもりですよ。頑張ってきましたよ、9年も、周りが1年や2年でよそへ行っちゃう中で。それなのにどう思います？ 身内にすらこんな扱いをされるってのは」

「そうねえ、一番がんばってるのに、たまらないわよねえ」

「自分がやってみたらいいですよ、『児童相談所さんは専門家でしょう』なんて言われて何でも最終的に押し付けられて、何の専門教育も受けてない事務屋の地方公務員だっただけなのに！」

しらふでこの勢いというのは、お酒が入ったらに手に負えないと思えるような様子だが、幸いに佐伯は酒がほとんど飲めず、運転もあるのでそういった飲み屋には行かない。気休めにしかならないかと思うけど、と孝子がすすめた気持の落ち着く効果のあるというハーブティーをすすりつつグチは続いた。

「でも、仕方ないとも思うんですよ、誰が悪いってことわけでもないわけで。今の児童相談所の仕組みだと対処療法的にやるしかないのはそのとおりだし、大きな枠組みの変化でも起きない限り、自分の役割もできることも今のままだろうし。もっとこう、いろんな人という枠を超えて、社会全体ぐらいのチームワークでやっていけたらとか考えるんですけど、自分がその変化をリードするだけの知識や実績を持ってるかっていうとそんなことないし……」

もういいやと言いつつ、児童相談所の理想のあり方を模索する様子に孝子は佐伯の真面目さを感じた。休み無く誰かの相談に乗っているけれど、相談したいことは自分の中にもあふれるくらいあるのだらうなと思えた。

「佐伯さんは今の仕事、100%嫌いな？」

「え……、全くってことは、ない……かな？」

確かに、この仕事が嫌いと言われる言葉につまるところはある。メンタルの不調で2年もたない職員も多くいることを考えれば、9年も続いているのは適正が多少はあるのだらうと思える。ごくまれにはあるが、問題が深刻にならないうちに対処できて、親子の関係がよいものになる手助けができたときなどは充実感が感じられるときもある。それは佐伯が公務員になろうと思った動機である「助ける手と助けを求める手をその間に入ってつなぐ仕事がしたい」という思いにもつながるものだ。

「環境がもう少し、ほんの少しづつでも良くなったら、続けたいなとは思いますが」

若き日に抱いていた初心をすこし呼び起こされ、後ろ向きではない言葉が口から出た。

「それをやるべきなのは本来もっと上の立場の人よね、現場を見てわかってくれているとは思いたいけど」

「なかなか難しいって、下としてもわかるんですけどね」

「実情を知らない周りやマスコミとかは仕事だからやって当然って言うものね。でも、理屈や命令だけじゃ割り切れないことはあるわよ、私だってそうなもの」

「孝子さんも？」

「ええ、義務とか体面とか、言い換えれば求められる役割だけで自分の行動を決めてたらやっていけないと思う。母親だって妻だって娘だって、里親だってそうよ」

孝子もカップを口にしてくいっと飲み干し、佐伯のカップと合わせてお代わりを注ぎながら続ける。

「最初に預かった子のとき、里親としてどうあるべきかってことは研修の資料とか、里親の体験談なんかを読んで結構事前に考えたりして、こう行動しようってプランは頭の中にあっただよ」

今にして思えば自分でもちょっとどうかと思うほど、ガチガチに気合が入っていたのだという。

「でもね、実際に生活が始まったら思い通りには行かなかったわね。具体的な出来事とその対処法とかは学んだことが参考になったけど。里親たるものこうあるべしっていう理念的なことはほとんど実行もでなかったし、むしろ素早く動くのに邪魔になることのほうが多かったわ。私がそんなだからその子との関係だって決まってしまうって言う言えなかったし、この調子じゃ児童相談所からこの子を引き上げられるかもしれないって思っていたもの」

そんな孝子の考え方を考えるきっかけ、それは何気ない夫の一言だった。悪戦苦闘の末疲労困憊していた孝子に夫が、「もっと普通でいいんじゃない？ 普通の家庭で普通に子育てをするのが里親だって言ってたじゃないか」と言ってくれたときにふっと肩の力が抜けるのを感じたのだという。

「それで里親だから、血縁がないからなんて、1対1の関係だったら気にしてもあんまり意味ないって考えるようになったの。だから今は里親だっていうことで実の親御さんに引け目を感じることもないし、むしろ何の永続的な義務もないからこそ、余計なものを挟まずに子どもにぶつかれるって心境になったのかもね」

孝子も最初から自分のやり方が固まっていたわけではなく、試行錯誤があったのだ。今さらながら佐伯はその積み重ねた日々の重さによって今の落ち着きがあるのだと理解した。

「家の中のことで言えばダンナの両親にだって不満がないわけじゃないし、本気でケンカしたこともあるわ。ダンナにしても子どもにしても同じよ。世間一般のいいお嫁さんだのお母さんだのをやることに意味なんてないって早々に割り切ったから今までやってこれたと思うもの。色んな役割が私にくっついてるけど、全てが自分が望んで就いた立場じゃないし、自分で選んだものだって、思ってたのと違うと後で気づいたものもあるわ。けど、やれるだけはやりたいって思うところはあるの、大げさになっちゃうけどこれは生き方の問題かもね」

孝子は少し照れくさそうに笑った。

「そうですね、安全地帯から綺麗ごとを言ったり、評論家めいた分析をするだけの人は邪魔ですし、こっちは具体的に困ってる人を目の前にして、何の武器も持たずに矢面に立つ日々なんだから、何か言いたいのならまずはあなたがこっち側へ来て行動してよと言いたくなりますよね」

関係者の会議でいつも「それは私の仕事じゃない、そっちのやるべきことだ」という態度をとる某人物の顔が思い浮かび、佐伯はうんうんと孝子に同調した。

その後は孝子の具体的な嫁姑関係や夫婦・親子喧嘩のエピソードで盛り上がり「これから先にまだ夢を持てる佐伯さんには聞かせないほうがよかったかなあ」と孝子は言ったが「もう十分いるんな夫婦や親子関係の現実には児童相談所で見てますから、幻想は抱いてません」と佐伯は苦笑いを返した。

閉店時間も近づき、だらだらとつきあってもらってしまったと申し訳なく思いつつ、佐伯が席を立つ。けれど、なんだかこのまま帰ったらまた思い悩んでしまいそうで、最後に一つだけという甘えで、椅子の背もたれを掴みながら尋ねた。

「私、この仕事、やってていいんですかね？」

それを決めるのは他でもない自分なのだが、今日はそんなことをつい聞いてみたくなる

気持だった。

「私は頼りにしてるわよ。仕事に気持が入っているかそうじゃないかは伝わるもの、それが佐伯さんには感じられるわ。自信があるかなんて、あるって言われるほうがちょっと怖いわ。それよりも逃げ出さないって覚悟を持ってるがどうかじゃないかしら」

その言葉に救われる気がした。孝子はこんな激流のような現場にふっと現れる助け舟のような人だなと感じ、その存在にただただ感謝し、頭を下げて店を出た。この仕事は自分でなければできない、そんな特別な存在だという思い上がりはしないけれど、ここまで勇気づけてもらいながら無様に逃げるわけにはいかない。ハンドルを握る手に力がこもり、お気に入りのナンバーを歌いながらさらにテンションを上げ、自分が行けるところまでは行ってやろうと夜道を走り抜けた。

内科での検査結果が出揃い、篤人は自分の身体面での症状は軽症だったと説明を受けた。ただ、食事や運動などの面での不摂生については栄養士の指導を受けることになったのと、入院中の精神科受診を主治医から勧められた。不眠や食欲不振、気力の低下などの表れは心のバランスの崩れもあるだろうとの指摘だった。

同じ病院内の精神科での診断は、服薬と休息での治療が望ましいとのことだった。児童相談所によって豊が保護されているという状況は、篤人にとっては本意かもしれないが治療に専念できる環境にあるともとらえられる。家族の一人が亡くなるという難局に直面している安田家が、安定的な生活に早く戻るためのチャンスと考えることもできるのではないかとと言われると、確かにこの状態で日々のタスクをこなしながらの治療は現実的ではないと理解できた。

今治療に入らずに悪化させたら回復までの時間はもっと長引くと思われるし、安定的になるまで内科的な対応も必要であり、自宅療養は危ういため、心身の調子の浮き沈みの激しい期間は入院という形で過ごしてはという提案がされた。精神科医にはもう少し考える時間がほしいと伝え、体調の回復具合を見極めながら、自己判断で任意入院にするかの判断をすることとした。

病室に戻り、改めて自分の状態を受け止める。入院など初めての経験だったため、検査の度に何を言われるのかという不安が続き、されるがままの状態であることが苦痛でもあった。だが、結果的に今までの先の見えない消耗戦のような気分での生活から、明確な回復の道筋が見えてきたことは明るい兆しに思えた。自分が関わりを持つことなどないと思っていた精神科の受診という出来事もそうだ。入院しているという状況でなければ、自分の状態がそこまで悪いと認めたくない気持ちから進んでその門を叩くことはなかっただろうが、検査の一環の流れに乗るように診断を受けられたことは幸いだったのかもしれない。

「事実は存在しない、ただ解釈だけが存在する」

いつもあの言葉を反芻しながら、思考はまた昨日の佐伯とのやりとりをたどろうとし始める。精神科医からは心身ともに回復してから考えるようアドバイスをもらったが、そういうわけにもいかなかった。ベッドに横たわり、体を使うことがないのならば、せめて何かを考えることに時間を費やさなければ使わなければ自分を保てないような気分になる。自分がハンドルを握っていた日々から隔離され、全てを取り上げられてどこへも行けない存在になったようで、無力感が再び頭をもたげてきた。

一時保護所から里親宅に移って1週間。佐伯が孝子に電話で様子を尋ねたところ、里親宅に来てからの豊の様子は初めての場所に対する緊張感もあるのだろうか、おとなしい印象を受けるとのこと。通っていた保育園に遊びに行き、園の先生方や友達と再会したときの様子はとても楽しそうで、明日も来るねと約束をして帰ってきたため、可能な限り保育園で過ごす機会を作ることになっているとのことだった。

「うちではいまのところ『いい子』にしてるわよ。でも、保育園に行くと本来の彼らしさが出るみたいね」

環境が変わると、そこは自分にとって安全なのか、そこにいる人はどんな人なのかがわからないため、手探りで様子を窺う時期は大人でも大胆な行動は避けるものだ。生物としての危険察知能力を鋭敏に発揮し、豊は慎重にふるまっているのだろうと思われる。そんな時期に勝手知ったる場所である保育園に行けることは、ストレスの緩和に有効なのだろう。

「まあ、これから色々出てくるでしょうけど、困ったらそのときはまた相談させてもらうわね。困らなくてもその都度報告させてもらうけど」

里親宅に来た児童がある程度の「ここは安全っぽいな」という感触を得た後には「自分をどこまで受け入れてくれるか」をあえて挑発的にも見える行動で試す様子が見られることがある。わざと食器を落としたり、コップの中のものをこぼして汚したり、食べ物の好き嫌いを激しく主張したりするなど、いわゆる「試し行動」と呼ばれるものを孝子は経験上予期しているのだろうと思われる。里親になるための事前研修などでも伝えることではあるが、孝子が最初に体験したそれは座学で聞いていたよりもなかなか手ごわかったらしく、「子どものエネルギーの無尽蔵さを思い出させられた」と語ってくれたことがあった。

孝子なら大概のことは受け止めてくれるだろうと思いつつも、児童相談所も随時様子を見させてもらい、必要な対策をとっていくと伝えて電話を置いた。とりあえず豊の側は比較的安定的に進みそうだが、篤人の側の打開策はいかにという課題は残っている。

篤人が退院することになればまた話し合いを再開することになるだろうが、今のところ

その連絡はない。入院という状況になればこちらから親子の面会の提案をするか、あちらから要望の出る時期ではある。入院が長引くのであれば、外出という形をとってということも検討の必要があるだろう。いずれにせよ、しばらくは待ちの体制となるだろうなというのが当面の見通しだった。

ところが、佐伯が平田とともに孝子の家を訪れて豊の様子を見ながら今後の方針を説明したところ、孝子から思いがけない提案がなされた。

「面会だけど、児童相談所ではなく 保育園の園庭解放へ来てもらったら？」
平田とは初めて顔を合わせてから2週間ほどしかたっていないが、孝子いわく、「丁寧なしゃべり方は肩がこる」とのこと、佐伯との会話と同じスタンスにするとの宣言があり、もうこの調子である。

「だって児童相談所って緊張するじゃない、大人でさえもそうなんだから。それに、子どもにとってはちょっとしたお化け屋敷に見えるんじゃない、あの古さだと」

その指摘には頷くところもある。歴史を感じる風格といえば聞こえはいいが、率直に言えば老朽化しているだけの建物だ。建物の維持管理担当部門からも改修の必要性は訴えているが、厳しい財政状況と利用者数などの勘案で優先順位は低いほうに置かれており、地震でも起きて使用不要にならない限りその見込みは立たない「おぼけが出そう」な佇まいをしているのが佐伯たちの職場なのだ。

「確かに、渡辺さんの言うように児童相談所では豊くんも初めての場所で緊張するでしょうし、保育園の様子を見てもらったほうが安田さんには好印象かもしれないね」

「でしょ、面会はやればいってものじゃなくて、きちんとした目的があつてだものね。できるだけ意味あるものにしたいわよね」

平田や孝子の言い分ももっともだ。確かに以前にも里親宅にいる子どもを親の入院先へ面会に連れていったこともある。より多くの目もあり、篤人にとっても慣れのある保育園というのは心情的にも児童相談所で行うよりも受け入れはよいだろうと思われた。

「わかりました、問題ないと思いますが、一応所に戻ってその方向で検討します」
また一ついい策が手元に持てたと佐伯は手ごたえを感じた。しかし孝子からはさらなるプランが示された。

「あ、それと、その後うちの実家の喫茶店へお誘いするってのはどう？」

「は？」

「え？」

佐伯と平田は同時に思考が停止したような声を発した。

「だから、あたしの職場へ来てもらうってことよ」

「いえ……、しかし、それは……」

全くの素人ならいざ知らず、里親としてある程度の経験のある孝子が実の親と里親の接触は原則行われないことを理解していると思っていたがゆえに、その提案の意図はつかみかねた。

「わかってるわよ、里親の安全を守るためとかいろいろ理由があつて、実の親との接触を控えるルールになっているのは。でも自宅じゃないならいいんじゃないの？ ねえ、心配なら佐伯さんたちも一緒に来てもらえばいいじゃない、それなら保育園でも児童相談所でもうちの实家でもあんまり変わらない？」

言われてみれば確かにそうだ、理屈としては、里親について篤人の理解を促すためには、里親に子どもを預ける際に実の親が感じる心理的抵抗の代表格である「自分より里親になつてしまい、里親に子どもを取られる」という間違つた思い込みを払拭する必要がある。それには里親側のガードをしつつも接触の可能性を示すのは効果があるかもしれない。

だがしかし、と公務員として佐伯は思考にブレーキがかかる。それが顔に出ていたのか孝子が気にしないでと続ける。

「ごめんなさい。私は言いたい放題だから困らせちゃうわよね」

孝子の懐は深い。相手を自分のテリトリーに入れてもそれに振り回されないだけの余裕を持って動けるだろうとは想像できる。篤人が感じている不安や不信を解消するには規則だからという説明ではダメで、里親というものの本質をわかってもらうことのほうが有効だと思われる。それができるのは児童相談所の言葉ではなく、孝子の姿に触れてもらうことによってではないかというのは本質を突いている意見だと思いつつも、それでいいのかと逡巡するところでもある。

「ごめんね、実家の話はとりあえず忘れて」

そう言われて保育園での面会について調整をとることを宿題として持ち帰ったが、忘れてしまつていいのかという思いがどこかでひっきり続けた。そのひっきりは、どこかで自分が求めていたものだったのではないかという気持ちがいつまでも消えなかった。

(この気持ちを信じて賭けに出るか……)

今までで最も深刻な表情と雰囲気漂わせ、河原に相談したいことがあると時間をとってもらった。

「いいんじゃない？ やってみようや」

河原の反応は拍子抜けするくらい即答に近かった。

考えられる懸念事項や、トラブルの対応などはいろいろと検討したうえで提示したつもりで、前例のないことや何故前例がなかったのかまで考えればこそ、孝子の前では表情まで固まつたプランに対してこれである。正直、この答えは予想していなかった。問題点の

指摘や練り直しが必要という話になるかと想像していたのだが。

「さっきの説明以上にあれこれ考えてのことなんだろう？ 以前から里親制度については思入れを持って手弁当であれこれやってるのも聞いているしな。今回の渡辺さんからの提案もきっかけていうだけで、浅はかな思いつきで走り始めようってことじゃないのわかるさ」

自分としては考えに考えた内容ではあるし、ゴーサインが出るなら望むところの状況だが、いざとなると結果の重みに対して躊躇してしまう面もある。

「ただし保険はかけてな、それを見破られないように。うまくいけばいい方へ動きが生まれるかもしれん」

河原の言葉が背中を押すように続く。行動は慎重にかつ大胆に、怯えて手を出さない者に再度チャンスがめぐってくる保障はない、そう諭すような助言だ。

「でも、全てをカバーするような保険をかけられるかっていうと、万一安田さんが思いがけない行動に出たら……」

自ら提案していながら情けないが、怖気づく気持ちも引いてくれない。

「なんかあったら……そうだなあ、あやまるしかないんじゃないの？」

「あやまるって、誰にです？」

「まあ、それはそのとき一番怒ってる人を見極めてからでいいでしょ」

確かに全てのリスクを想定して準備することはできない。できるのは不測の事態がありうることを頭に置いて、どうにでも動ける体制を作っておくことだ。

「そんときの責任は児童相談所が負えばいい。子ども里親さんも全力で事後のフォローをする体制を取る。それに安田さんもそこまで追い詰められてるわけでもないし、ここで後先考えない行動に走るほど計算できん人でもないでしょ、暴発しそうなエネルギーが有り余ってる状態でもないと思うけど、そこはどう思う？」

「……信じたいところです」

「だよな、信頼しあわにゃ 安田さんちの目指すゴールへの支援なんて無理だもんな」

「そうだ、これは児童相談所の功名心からじゃなく、安田家の元の生活への復帰を目指すための方策なのだ。決して手前勝手な行動ではない。」

「所長にはうまく言っとくから。まあ、最大限ずいことになったとしても俺や所長の立場が危うくなるだけだ、安心してやってみなって」

何故ここで出てくるのかわからない笑みが河原の顔に浮かび、状況を楽しんでいるかのような口ぶりで言い切った。

「所長に責任を……？」

「上司の首のつかいどころはこういうとこだよ、うまくいったら学者が研究対象にしたいくらいニュースバリューはあるだろう。そんなときは所長の手柄になるんだから、若い人の遠慮はいらんよ」

この人どこまで本気なんだろう？ 尊敬する上司ではあるが、その底が見えたことは一度もない。就く仕事を間違っているんじゃないかとも思うが、どの仕事について周りが安心しきることなどないだろう。そういう意味では権限の少ないここを居場所にしてもらうことがかえって社会のためかもしれない。今は偶然の巡り合わせでその上司になってしまった所長に同情しておくことにしよう。

腹は決まった。後は可能な限りのトラブルのシミュレーションと、対応体制の協力依頼という準備をするだけだ。

最悪のニュースは最悪のタイミングで入ってくる。そんな法則はないだろうが、その日の朝一番で、佐伯宅のリビングに置かれたテレビから流れてきたニュースは、そんなめぐり合わせのものだった。

某所で起きた里親による児童虐待に関するニュース報道。状況としては書類送検された段階なのだが、昨今の児童虐待への関心の高さもあいまってトップニュースで伝えているテレビ局もあった。

報じられている虐待や傷害の疑いが事実だとしたらあってはならないことだ。これまでに何度も似たようなことが起きている中でのことでもある。里親だけでなく、発生を防げなかった児童相談所の責任も厳しく問われるだろう。佐伯たちも対岸の火事などとは思わず、自らを省みる気持ちを新たにするとところだ。

しかし佐伯はその報道が今日であったことに頭を抱えた。

「あの、明日、私は親に里親委託の再打診をしようとしているんですけど……」

言いたい放題のコメンテーターにいつもは呆れるだけだったが「やめてくれえ……」という心からのうめき声をあげて力なく電源を切った。リモコンを食卓兼作業テーブルに置き、咀嚼を中断していたハムエッグをトーストと一緒にコーヒーで流し込んだ。

出勤すると、朝礼で所長から件の内容について軽く触れる話があり、改めて関わりのある児童について確認に漏れのないよう留意するよう指示があった。職員一同はもとよりそのつもりだ、巡り合わせにツキのなかった佐伯もまた。

この地域で起きたことではないが、考えうる最悪のタイミングだ。今日から明日にかけて追加の報道で事件の背景などについても情報はいろいろ出てくるだろう。それを目にした篤人が決断するのは施設入所になるんじゃないかと弱気にもなる。せめて今日が篤人との面談なら、ニュースを目にしえない可能性もあっただろうが……。

「気にしなさんな、ニュースバリューだけを基準に興味本位で追っかける奴らに俺らの仕事を振り回されることはないさ。これまでの積み重ねに自信を持ってりゃいいんだよ」

佐伯の明日の予定を把握している河原が声をかけた。
「うちの方針は親にお伺いを立てるもんじゃなくて、これが今は最善だとぶつけるものでしょ。相手への配慮はもちろんするけど、相手に気に入ってもらうためのものじゃないんだからさ」
確かに里親委託が一番望ましい方針なのは変わらない。手元には出来立てはややだが丹精こめて練った策がある。
「絶好のチャンスは最悪のタイミングでやってくる」かもしれないが「誰かにとっての最悪のタイミングはもう一方の誰かにとって最良のタイミング」だとも言える。
それにこの舞台はその賭けをするのにこれ以上ない条件がそろっていると思えた。信頼できる上司、力強い協力者である孝子とそれに応えたい自分の気持、今ここ以外でその賭けに出る気は起きないだろうし、再度その機会がある保障もない。
「ようし、やるか！」
洗面所で鏡に正対し自分を見据える。臆している状況ではないと頬を叩いて気合を入れ直し、机に戻った佐伯は関係者に明日の予定を再確認する電話をかけ始めた。

< 第7章 縁起のいい場所 >

翌日、園庭開放の行われている豊の保育園に篤人の姿があった。朝食後に病院から外出し、自宅に寄ってから来たとのことだった。児童相談所からは佐伯と平田とで豊を保育園へ連れてきて篤人を迎えた。依頼していた豊の衣服などを預かり、面会終了予定時刻と豊と話す内容の注意事項（里親の家の場所を聞かないこと、家に帰れる時期は決まっていなくていいことなど）を説明し、後は自由に園庭で2人で過ごしてもらうことを伝え、2人を引き合わせた。万が一、篤人による園外への連れ出しがあった場合の対処のため、入り口では保育園の職員が出入りを確認、駐車場では三島が豊を連れてきたものとは別の車で待機しつつ緊急対応を行える体制をとった。

程なくして園の中を抜け、1階のウッドデッキテラスに篤人と豊が出てきた。2人の視線に入らない位置を探し、佐伯と平田は様子を観察した。久々の再開なのだ、豊は篤人に抱きつき、泣いている。入院のことなどは佐伯が説明していたが、互いに一人きりの家族になってしまった父子が別々に生活しなければならない状況は、大人の都合と思われても仕方が無い。転々とする居場所では我慢をして、あまり自分を出さずにいたのだろう、少なからず心の負担をかけてしまっていると感じ、心が痛むのを感じる。

それでもしばらくすると、豊は篤人が自分を見ていることを確認しながらもいつもどおり遊び、一区切りつくたびに篤人の手を引いて遊具を移動していく。親子の関係に緊張感を感じられず、客観的に眺めれば保育園の見学に来た普通に在る親子に見えるだろう。園長や担任の見解も同じく、休みがちだった時期よりも篤人の様子は柔らかな感じかするとの評価だった。

そうこうしているうちにお昼の時間になった。今日は保育園の児童と園庭開放参加児童と一緒に、園庭に敷いたビニールシートの上で同じご飯を食べる催しがある。その時間を利用し、篤人と佐伯たちは話し合いの時間を職員室で持った。

入院生活であまり体を動かしていなかったことによる疲れもあるのだろうか、篤人の表情は先ほどまでと比べればやや固いものになっている。時間もあまりないことから佐伯が口火を切った。

「豊くんの様子はどうお感じになりましたか？」

「そう……ですね……、楽しそうにしていると思いました。家から通ってたころと変わらない感じで……」

「私たちもそう思います。お友達やここの保育園の職員との関係は豊くんにとって大事な財産なんだと思います」

園長が頷きながら篤人の感想に答え、それに佐伯が続ける。

「安田さんのお家での豊くんの生活の体制が整うまでの間、この保育園に来られる環境は確保したいと思うのですが、どうでしょうか？」

「それは……、豊にとっては、いいことだと……思います」

一つ一つ言葉を選ぶように篤人は肯定の意向を示した。

「以前にご提案させていただいたように、里親さんのお宅での生活を一時保護という形から正式なお預かりという形に変更すれば、園庭開放の時間に限らず以前と同じように朝から夕方まで通うこともできます」

「……わかります、このままのより、そのほうが……」

表情は固く、言葉は搾り出すような感じのままだが、異を唱える様子ではない。

「何もできない、私の都合で豊から保育園をとりあげるなということ……」

その言葉を遮るように佐伯が切り込む。

「安田さん、豊くんをこの保育園に入れてくれたのは安田さんですよね？」

「……はい？」

「それは豊くんにとって、とても大きなプレゼントだと思うんです」

篤人はきょとんとした表情を浮かべ、話の流れが読めないといった様子でいる。

「保育園のお友達、その親御さん、先生方、地域の皆さん、いろんな人が豊くんを知っています。豊くんを気にかけてくれています。今が安田さんのご家庭にとって一番大変な時期だと思います。その時期でも豊くんは安田さんが作ってくれた環境のおかげで、楽しく過ごす時間を持っている、違いますか？」

「そう……、なんですか？」

「はい、ですから、私たち児童相談所も、今一時的にお預かりさせていただいている里親さんも、豊くんをとりまく環境の仲間にしてもらえたらと思うんです」

園庭開放の時間も終わりに近づき、保育園のスピーカーからアナウンスが流れた。他に参加していた親子が三々五々に帰っていく。話し合いが水入りになったような雰囲気になり、篤人が反論する。

「でも、この間言ったように、こういった場でしか会えないのはやっぱり……」

「それについて、提案を兼ねてお連れしたいところがあるんです。お疲れのところ恐縮なんです、もう一箇所おつきあいいただけませんか？」

篤人と豊を連れ、佐伯らが車で移動した先は畑と木々と芝生に囲まれ「喫茶店なすび」という看板のある、今風に言えば古民家という佇まいの建物と自宅兼店舗といった感じのもう一棟が隣り合わせて建っているところだった。

「ここは喫茶店……ですか？」

「ええ、まずは中へ」

新しい感じのほうのドアを「こんにちはー」と言いながら佐伯が開けると、おしゃべりの賑やかな声が漏れてきた。

「いらっしやいま……、あぁ！ お待ちしてました、どうぞスリッパに履き替えて奥へ」
カウンターの奥にいた孝子が佐伯に気づき、左手奥の大テーブルを勧めた。

木製の大小6つのテーブルとカウンター席のあるフローリングの店内。最奥には壁一面に陶器や磁器のカップが並んだ大きな棚がある。白い壁紙を南側のテラス席からの太陽の光が暖かく照らし、和らいだ雰囲気漂っている。

ベンチ席の一番奥に豊が一番に陣取った。その隣を篤人に勧め、その横へ佐伯と平田が腰を下ろす。

「そこが豊くんのお気に入りだもんね」

水差しと不ぞろいなグラスを4つ持ってきた孝子が声をかけると、豊は壁に立てかけてある絵本を手に取り、篤人に見せる。

「これ、おうちのとおんなじ！」

いろいろな乗り物の写真が載っている大判の絵本だ。確かに安田家にも同じものがある。

「男の子はそのシリーズが好きですよね〜」

「あ、ええ、そうですね……、ずっと眺めてるんで、助かるというか……」

孝子の声かけに少し緊張した様子ながら、篤人は答えた。

「そこに飾ってある絵、豊くんが描いたんですよ」

「え、これですか？」

孝子が指し示したのは赤い大きな消防車、はしご車だろうかと思われる絵だった。豊が反応し、保育園に消防車が来て、運転席に乗ったことなどを楽しそうに話す。孝子がそれに応え、佐伯に「じゃ、決まったら」と告げてカウンターへ戻った。

篤人は孝子と豊とを交互に見て、状況がつかめないといった様子で佐伯に尋ねる。

「あの、豊はここに来たことが、あるんですよね？」

「ええ、そのようですね」

「児童相談所が連れて来たわけじゃないんですね、そうすると誰が……」

「まあ、その前にオーダーを……」

「ばく、バナナジュース！」

「はい、お待たせ」

「え？」

孝子が豊の前に子ども用のストローの添えられたプラスチックのコップを置いた。テーブルを囲んでいた全員が驚く、特に篤人が。豊の大声を聞いてからは早いなんてものではない速度だ。早速口をつけた豊の様子を見て、「豊くんの『いつもの』だもんね」と言ってカウンターの中から孝子とは別の女性が笑顔を見せている。ここの店長である孝子の姉の富士子だ。

「大人の皆さんはブレンドでよろしいかしら〜？」

「ちょっと姉さん、初めての方もいらっしやるんだからそんな大雑把な……」

孝子がたしなめたが、3人は「それで」と受け入れたので富士子は「でしょ？」と言わんばかりの表情で見つめ返す。

「じゃあ、初めての方はその棚からカップをお選びください」

孝子はそれ以上富士子には付き合わず、篤人と平田にテーブルそばの棚を指し示した。陶器や磁器の色々なカップが壁を彩っている。孝子の言葉の意図をつかみかねている様子の2人に佐伯が説明する。

「このお店の面白いところは自分が飲みたいカップを選んで呑んでもらうってことなんです。毎回違うカップを選んでもいいですし、自分のカップをキープしてもらって専用にしてもらうこともできるんですよ」

そう述べる佐伯の手にはカウンターから富士子が出してくれた飴色の陶器のカップが握られている。これが佐伯のキープしているものだ。

「キープにはカップの買取が必要になるんですけどね。それでも、一品物の手作りカップがたったの1000円。さらにキープしたカップで呑む場合、飲み物のお値段100円引きになるサービスがあるので10杯で元が取れるお得なシステムなんです」

「宣伝ありがとね。ということで、初めてのお二人さんは今回はお試してうちの両親特製のカップ達からお気に入りをを選んでくださいな」

孝子から勧められるままに、篤人は白地にブラウンのアクセントの入った磁器のカップを、平田は黒のマーブル模様の陶器を選んだ。孝子が器を木製のトレーに載せてカウンターへ運ぶ。富士子が中身を注いでいる間、3人は絵本に夢中な豊のいるテーブルへ戻った。

「お店もお庭も広くてきれいですねえ」

篤人と同じく初めての来店となる平田が感想を漏らす。テラス席の向こうにはよく手入れがされた庭と畑が広がり、駐車スペースとの境には木々が生い茂っている。

「入る前に見た隣の和風の建物もお店の一部なんです。さっきの入り口の反対側から行ける畳敷きの個室になるスペースもあって、貸切でお茶会や会合なんかを使う方地元の方も多いらしいです」

勝手知ったるといった感じで佐伯が説明する。

「ああ、里親会の会報でよく出てくる会場の『なすび別館』ってそのことなんですよ」

平田の口から出た里親という言葉に篤人が反応した。先ほど途中になっていた話に意識が戻ったのだろう、カウンターの2人に視線を向けた後、佐伯に尋ねる。

「ここには、里親さんが？」

「ええ、連れて来てくれています」

そう答え、ここに篤人を連れて来た本題へと話を進める。

「お家に帰れる環境を整えば帰ることになるわけですから、そのときにスムーズに移行できるよう、今までの生活となるべく変わらない状態で過ごせるようにという思いでされているんです。馴染んだ保育園に行くこと、施設ではなく普通のお家で生活すること、地域のお祭りなどの行事に参加すること……」

どれも遠く離れた施設では実現できないことであるし、一時保護の状態では保育園に通うことができないという制約もある。

「それに加えて、この期間に豊くんの側の安心な環境を構築することも進めたい。そう考えて地域のお知り合いを増やすことにもなるという意図で、ここの常連になってもらおうとされているんです」

支えてもらえるものは何でも使う、それは篤人に対してだけではなく、豊に対してもというのが児童相談所の方針だ。

「いろんな人と出会って、いろんな人に支えられて、そして将来は支える側の役割も持つ。ここは豊くんのふるさとなる町ですから、そのつながりを時間的にも空間的にも断ち切らずに続けることが豊くんの財産になると考えているんです」

豊はジュースを飲み終わり、絵本も置いて庭へと出て行った。コーヒーを運んできた孝子がそれを追いかけて外へ行き、豊の遊び相手になっている。常連らしき年配の女性たちもそちらへ移動し、店内には篤人たちだけになっていた。そうなるタイミングを見計らっていたように佐伯が話題を変える。

「ところで篤人さん、昨日今日で気になった児童相談所に関するニュースはありませんでしたか？」

その問いに篤人は視線を少し外して考え、佐伯の意図を探るような口調で答える。

「……里親の虐待の話ですか？ 確か東京のどこかであったとかいう」

「ええ、その件です。どうお感じになりましたか？」

「それは、今こんな状態で、豊にもそういう話があるわけですから……。大丈夫なのかな、とは思います」

「はい、そのご心配はもちろんです」

そう言って佐伯が鞆からクリアファイルを取り出す。児童相談所で作っている虐待関係の記事の切り抜きを集めたスクラップブックだ。今年に入ってからの方だけを持ってきたが、背表紙の厚みが8センチあるファイルはばんばんになっている。それを開き、関連の新聞記事が収められているページを篤人に見るように向けた。

「虐待はあってはならないことです。しかし残念ながら多くの事件があります。一般の方が知る以上に私たちはそれを実感しています」

マスコミ報道されたものだけで、このファイルの分厚さだ。ニュースとしての価値がないと判断されたものを含めればその数は途方もないものになる。統計上の数値は増加の一途をたどり、最新のものでは新たに確認されたものだけで年間7万件を越えている。その影にはさらに多くの隠れた虐待被害があることになる。

「これだけ虐待はいけないうことだって報道もされていて、一般的な言葉にもなっているのに被害を受ける子ども減っていかないのはどうしてでしょうか？ いろいろな意見や分析はあるんですが、虐待というのは、どうしても閉じた空間の中で起きやすいという一面があると思うんです」

新聞で今回の事件を論評した大学教授も「他人の目の入らない家庭は里親であってもそうでなくても同じ危険をはらんでいる。閉鎖的なところでは強い者から弱い者への不当な扱い起きやすい」と述べている。

「これと似たような出来事って家の外で何か例がない？」

佐伯に話を振られた平田が記事を見ながら答える。

「うーん、何だか学校でのいじめに似てるような……」

「いじめ？ どのあたりが？」

「ええと、いじめもすごく昔からある話で、最近でも大きな問題になってますよね。前はなかなか学校が認めなかったりもして、隠されたこともあったり、大人に気づかれないように行われていることも多いし」

「そう、いじめにもいろいろな形態があるでしょうけど、支配的な強いメンバーが、一方的な意見で『こいつはいじめていい』という一つの絶対的な流れを作ってしまう。そして集団にはある程度拘束力があって、弱いメンバーは簡単にはそこから逃げられない」

誰も「おかしいよ」とは言えない。言えるんだったら「そうだよね、おかしいよね」ということになっていくはずだ。強い大きい声で「文句あるか？」ってすごまれて、その声に支配されてしまう閉鎖された空間が悲劇を生むことは多いだろう。

「個人的には、他人の目が入って、ある程度自由に意見が言える雰囲気のある開かれた場所にはいじめや虐待は起きにくい、または起きても深刻なものにならないと思うんです。例えばこのお店を見てください」

佐伯は体をカウンターからテラスにゆっくり視線を動かしながら言葉を続ける。

「ここは親子3世代がお暮らしの店舗兼自宅という場所なんです。親子に加えておじい様おばあ様がいる、加えてここに住む娘さんの富士子さんの妹の孝子さんがお手伝いに来てさらに目が増え、老若男女いろんなお客さんが来ることでさらに倍増。誰かが誰かを責めることがあっても、別の誰かが味方になってくれる、ここに『虐待』って匂いは感じに

くいですよね」

この家にはいろんな人が出入りする。もちろんみんなが入れるお店のスペースとプライベートなスペースの区切りはあるが、ずっと閉ざされたままの空間になることはない。

「それに、ここは家族というお店の人だけの力では成り立たない。畑を手伝ってくれる人、コーヒー豆を持ってきてくれる人、お友達を連れてきてくれるお客さんなどの色々な人の支えもあってこの場所は居心地のいい場所になっているんだと思うんです」

常にはなくてもいいから家を外に開く、家族という限られた人間関係だけで完結しないようにする。そんなことを地域との関係によって自然に作っていた時代が以前はあったのだろうと思われる。

「家族のつながりっていうのも負の部分だってあるんだってことはみんな実はわかってますよね、あまり声高には言わないですけど。嫁姑問題とか、家庭内暴力だって、虐待と同じく家族の中で起きているんですし」

それがあたかも絶対的に正しい関係のように扱われて、他人が入り込むのを嫌うようなものになると、ひとつたびバランスが崩れた際には出口がない危うさがある。絆を強調することは、逆に外部の関与を排除して、とても冷たい関係を作ることにもなってしまう。

「だから、開かれた暖かさを迎え入れること、あの大きな窓から入る光や風のような、固まった空気を入れ替え、暖かさと共存することが大事なんじゃないかと思うんです」

佐伯の話は篤人は黙って聞いていた。

篤人に安田家とこの家のどちらが正しいかなどということを考えてほしいわけではない。篤人と豊のいる安田家も、ここにある暖かい空気とどこかでつながっている、誰だってつながる可能性を持っている。豊の母親の死によって、重い悲しみを負ってしまったであろう2人にはあの家で寂しく日々を過ごすしかない、などということはないとわかってほしいという祈りだった。

沈黙を埋めるようにコーヒーを口に含むと、その暖かさに胸の奥がほぐれるような感覚を篤人は覚えた。いろいろなことが、もうずっと遠くにあるように感じていた。でも、まだ思い出せる日々がある、その日々のように走り回って笑う豊の姿。それは何も変わってはいない、あの日々から続いている今日に在るのだと、そしてこれからもそれは続いていくのだと思えた。

ガラス戸の内側には使われた器が並んで乾かされている。それらはのどかに日向ぼっこをしているかのように見え、一つ一つの陶器や磁器には自分と同じようにここに来た一人一人の存在が重なっている。その戸が開き、豊が戻ってきて膝にまとわりつく。今の自分たち、一時保護されている子どもとその親というくりなど、さして意に介さないような空間。言われるがままに連れて来られたのに、何か帰ってきたというような気分になる、不思議なところだと篤人は感じた。

病院に戻る時間が迫っている。篤人は里親が迎えにくると豊をしばらく抱っこして短く言い聞かせるように別れを告げた。少し泣いた豊を孝子が変わって抱っこをして預かった。長らく引き止めたおわびではないがと勧められて平田の運転する児童相談所の車に佐伯とともに乗り込み病院へ向かう。車内では疲れたと告げて目を閉じたままの篤人を気遣い、佐伯も平田も無言に近かった。

「無事、終わりました」

篤人を病院に送り終え、お大事にという以上の会話もなく別れた後、児童相談所に電話を入れた。出たのは河原だった。

「面白かっただろう」

「何がですか、もう緊張しっぱなしでしたよ」

「バクチは負けるかもしれないから面白いんだよ、それも不利なほうにさらにな。ともかくお疲れさん、戻ったら所長に報告頼むよ」

「わかりました」

電話を切った後、緊張感から開放された助手席のシートの上で少しばかりの達成感が佐伯を包んでいた。

気が肩透かしに終わったのは、なすびの雰囲気、富士子と孝子の存在に関係者の緊張感までに包まれてしまったかのようなだった。それは篤人も同じだっただろうかと、無人になった後部座席を振り返り、先ほどまで眠るように座っていたその姿を思い出していた。

やれることはやった、どんな結論を出すかは相手任せになる。その結論に付き合い続けるのが自分の仕事だと頭を切り替え、この後に詰まっているスケジュールを手帳で確認し、漏れそうになるため息を気合で押しつぶして飲み込んだ。

保育園と喫茶店へ行った疲れからか、久しぶりに深い眠りにつけた翌日は篤人にとって2回目となる精神科の受診日だった。この10日ほどの間の出来事や気持ちの波などを話した診察の終わりに、心理士によるカウンセリングを受けてはどうかと勧められた。どんなことでも構わない、考え事を整理するためにでも使ってみてはと言われるがままに承諾し、ちょうど次の枠が空いているからとのことなので、渡された「相談申込票」に簡単に記入し、病院らしくない雰囲気のする相談室を尋ねた。

相談室の扉は開かれている。それは概念的な言い回しに限っているのではないということを表しているのか、物理的にもそうになっていた。開け放たれたドアに吊るされていた

「御用の際は鳴らしてください」というパイプチャイムを揺らすと「はい〜」という穏やかな声とともにかなり強めの天然パーマと思しき髪型をした細身の男性が顔を出した。予

約を入れてもらった安田ですがと伝えると「どうぞどうぞ」と入室を勧められ、ドアの外
の表示が「相談中」と切り替えられてドアが閉まった。

丸いテーブルと椅子が2つ、あとは観葉植物があるだけの部屋。扉を閉めると外の音は
すっと消え、窓から入る光もあいまって温室の中にいるような落ち着いた雰囲気を感じら
れた。

男性は臨床心理士の岡本と名乗り1回の相談時間や秘密は守られることなどの相談室の
説明を短く行った。手にしていた相談申込票を渡し、確認のような自己紹介を経て相談は
始まった。

「どういったことを望まれてここに来られたのか、改めてお聞きしていいですか」

そう問われ、頭の中を占めている考えごとを整理したいと答えた。具体的にはというこ
とで児童相談所との関わりが始まりから今に至る経過を、里親に預けるか否かの結論を出
さなくてはいけない状況になっているところまで話した。

話していくうちに、自分は豊のために何もできていない、自分がいることがかえってよ
くない状態を作っているということがはっきりしてきて、最後に自分はダメな親だと自嘲
気味に付け加えた。

話の間、口を挟みはせず、時折うなずきながらじっと聞き入っていた岡本は、篤人の口
が止まったのを見定めたかのように、「とてもお辛い状況でがんばってこられたんですね」
などと労いの言葉をかけた。そして、「一般的なお話で、全ての方にあてはまるわけでは
ないんですけどね」と断ったうえで見解を述べ始めた。

1か0か、白か黒かの考え方になってしまうと辛くなってしまふ。100点でなければ
その他は全部0点という評価は極端なもので、普通に考えればそんな考えはおかしいと思
えるのだが、そう自分で思えないのが辛くなってしまふ人の特徴でもある。完璧にできな
ければ何もしていないのと同じなんてことはない、99点も50点も、20点だって0点
よりはいい部分があるのだから。

「確かに安田さんは入院が必要なくらい自分の体調を悪化させてしまわれました。ですが、
あなたのお子さんは世界で一番不幸なのですか？」

違うでしょう、という意味を含んだ問いかけに、篤人もそうは言い切れないという思い
を抱いた。

「それは……」

短い言葉と表情から思いを汲み取ったように岡本は言葉を続ける。

「それはあなたがこれまででも、今回の状況になってからも、ぎりぎりまでお子さんのため
に頑張ったことがつながっているんじゃないでしょうか」

「でも、親として、子どもに十分なことができてなくて……」

「お子さんやご家庭に起きたことは、全てがあなただけのせいですか？」

それもやはりよく考えれば「違う」と言える気がして、小さく首を横に振る。

「ですよね。だから誰もあなただけを責めることはできないし、そうもしていないでしょ
う。お子さんもあなたも、同じように助けが必要な状況だったんだと思うんですよ」

「助け？ 私にも……？」

「児童相談所に限定するわけではないですが、あなたには相談相手が必要だったんじゃない
でしょうか。今回の児童相談所との出会いはあなたから見たら急な話で、おせっかい
をされたという気分になるかもしれないのですが、嫌われてもそれをやるのが行政の役
割でもありますからね」

佐伯をはじめとして、豊のことで関わっている関係者は確かに篤人が頼んで関わって
もらっているわけではない。それでも、その関わりがなければ入院しているこの状況で豊が
どうしているかと思うと、それによって助けられていることは認めざるを得ない。

「いつまでも一人でがんばり続けたいといけなと言われてたら、いつまでたっても安心す
ることはできない、そんな日々には誰も耐えられないですよ」

子どものことに責任持つのは親として当たり前と一般には言われる。でも、それを一人
きりで背負える者は存在しないだろうということだ。

「あなたが倒れたら子どもも共倒れ、そうなったら責任は果たせない。そうならない多層
的で安全な環境を作ることこそが親の責任を果たすことなんじゃないでしょうか、それ
は一人で何でも完璧にこなすだけではダメなんですよ」

佐伯らがよく言う安全という言葉には反発する気持ちを篤人は覚えていた。一人で何
でもできるわけがないだろう、と。だから保育園や里親や昨日の喫茶店なども含めたサポ
ートを勧めてくるのかと思いついた。

「でも、できればそんな助けを借りずになんとかしようとするべきでは……」

「う～ん……仮に今を、精一杯の頑張りで、言い換えればかなりの無理して乗り切ったと
しましょうか」

「はい、それは親としての責任を果たすことですよ」

「でも、今をのりきっても、いつかまた次の困難が訪れるでしょう。そのときに対応する
力が残っていないければ、余裕がない状態になっていたらどうなると思いますか？」

「それは……」

一人の力では限界があるし、この先に起きる全てを予期して準備することはできない。

結局は行き詰ってしまうということだ。長い将来にわたって問題は次々と起きてくる。

「人生の詳細なマニュアルを作ろうとしても現実には無理なんです。できるのは何かが起
きた時、パニックにならずに、自分だけではどうにもならないことなら、誰かの力を借り
ること。それも立派なあなたの力だし、必要な準備になるんだと思います」

岡本は軽く笑って続ける。
「よく私も自分に言い聞かせるんです。自立するってことは、全部自分でできるなんて思
い上がらずに、適切に誰かに頼れるってことだって」

自分にとって不可能なことだけじゃなく、不得意のレベルでだって頼るほうがいい結果
を生むことがあれば躊躇は不要だという。

「それで、いいんでしょうか？」

いぶかしげな篤人に対し、岡本はもちろんというように大きく頷いた。

「その頼り方については、相手のタイミングを見計らったり、話を手短かにまとめたりとか、
なるべく上手くできるように成長しようとは思いますが、今までもこれからも私は師匠に
あたる人にヘルプは出しまくりですよ。だってさっきの言葉は師匠が私に教えてくれたん
ですからね」

それを忠実に実行しているだけだと少しおどけるように小さく胸を張ってみせる。

「私の例に限らず、あなたもお子さんも、頼れる人というか困った時に頼りにできる存在
を多く作ることは有効な手段じゃないでしょうか？ 親一人で手が回らなければ、みんな
でやればいい。昔から人類を含めた生物はそうやって共同で子育てその他の営みを続けて
きたんですから。その『みんな』は意外と近くでみつかるんじゃないかと思うんです。か
っこつけさせてもらえれば、私もその1ピースなのかもしれません。そのピースを偶然に
でも見つけて、今まさに一つの大きな塊にしているのは、他ならないあなたなんですよ」

時間が来て今回の相談はここまでとなった。今日の続きでもいいし、別のことでもいい
のでまた希望があれば予約をとまれ、病院内の内線の書かれたチラシを受け取って相談
室を出た。

病室のベッドに戻り、天井を見上げて自分と豊にまつわる人の名前と顔を思い浮かべ
てみた。

(今の自分にできることは少ないけれど、今の自分が助けてもらうことのできる人を集め
れば……)

それでいいのなら、それならばやっていけそうだと思えた。一人きりで描いた絶望的な
未来予想図にはならないはずだと。

涙がこぼれる。真理子の骨壺を抱えて部屋に戻り、豊を寝かしつけた後、一人真夜中に
トイレに籠って泣いて以来の落涙だった。それ以降、自分は完全な大人でなければいけ
ない、やるべきことをできないとは言えないと自分を縛っていた。でも実は崩れ落ちそうだ
った自分を受け入れられなかった苦しさが洗い流されていくようだった。

それでも自分が少しでもよくなれば、自分のできることも増える、その分だけさらに豊
にしてやれる。その全重量が多くなる。拳を強く握り、意思を固めた。じっくりとしっかり
りと直そう。服薬による症状の安定が見えるまで任意で入院して、入院を繰り返さないだ
けの安定した生活の基盤を作ろう。それができるまでは豊にちゃんとした環境を用意して
あげるのが自分の役目だ、それが自分だけでできないのなら、児童相談所に里親に託すこ
とを決めるのが、自分にできるせめてものことならば、それが自分の責任というものでら
う。

翌日、朝一番で篤人から佐伯に連絡が入った。

「里親のことは佐伯さんにお任せします」

「それは、里親に預けることにご同意をいただけるということでよいでしょうか」

慎重に言葉の真意を確かめたが、即座に「はい」という答えが返ってきた。

「今日、そちらへ伺います。その時にもう一度きちんとお話を、それと豊くんが好きなお
家の近所の遊び場などを教えてください。地図を持っていきますので、里親に伝えて、豊
くんが一人だけでは行けないところでも今までのように遊べたらいいと思うんです」

篤人はわかりましたと言った後、電話を切った。

その日の午後には佐伯は里親に預けるにあたって必要な書類を持って病室を訪ねた。改め
て篤人の意志を確認し、同意書などを作成した後、入院治療の予定などを篤人が説明した。
児童相談所の示した方針に理解をもらえたことに佐伯が謝辞を述べると篤人はその理由を
説明するかのようには話し出した。

「佐伯さん、あなたは会うたびに、児童相談所の用件ではなく今豊がどうしているかを一
番に教えてくださいました」

篤人の口調と表情は落ち着いている、佐伯は書類を整理する手を止めて聞き入った。

「あなたが選んで決めた行き先以上のものを私は今提示できない。それを認めることが私
にできるけじめだと思います」

そう言って改めて豊をよろしくお願ひしたいと頭を下げた。恐縮する佐伯に対し、篤人
が少し遠慮気味に言葉を継いだ。

「迷惑ついでに一つ頼みたいことがあるんです」

迷惑だなんて、という言葉を出すのも無粋と思い、佐伯は素直に尋ねた。

「何でしょうか？」

「豊はいつも黒いブタのぬいぐるみを大事に抱えて寝ていたんです、それをなんとか渡し
てやれないでしょうか」

お安い御用とばかりに即答する。

「できます。一時保護所にいるうちは、他の子とトラブルになるのを避けるために禁止に
なっているんですが、里親のお宅へ移ったので私物も持てます。ご帰宅されたら私に預け
ていただければお届けします」

「いえ、ここにあるんです」

「え？」

「そこの、下にあるバッグを開けてもらえますか？」

篤人が視線で示したのは佐伯が救急車に乗り込むときに抱えたカーキ色の布製のバックだ。ジッパーを開けると手触りのよい黒いブタのぬいぐるみが顔を出した。

「あの日、倒れてしまった日にも、頼もうと思って持って行ってたんです」

「そうだったんですか……」

「お願いします、自分が今何もできないことは認めますが、せめてこれくらいは……」

「そんなことはありません」

佐伯は力を込めて、篤人の弱気を支えるように言った。

「そのお気持ちは必ず豊くんに伝わるはずですが、今は早く元気になってあげてください」

篤人は小さく頷く。

病棟の廊下を歩きながら、小脇に抱えたぬいぐるみを見つめた。ひょっとしてこの子は入院中の篤人の心の支えだったのではないかと佐伯は思った。自分にとってのうさ子にも似た存在、それをゆだねてくれたことは気持ちの大きな切り替わりのサインであると受け取っていいのだろうか、そう考えつつ少しだけ気持ちが高揚するのを感じて病院の階段を3階分早足で下りていった。

(これで、よかったんだよな)

篤人は佐伯に託したぬいぐるみと一緒に家から連れて来た一回り小さな白いブタのぬいぐるみを胸の前に置いて語りかけるように見つめた。結婚したばかりの頃に、「黒いのがあっくん、白いのがあたし。だってあたしの方が色白でかわいいでしょ」と言って真理子がペアで買い求めたのがこの2匹だった。

篤人は昨日の夜、久しぶりに穏やかな夢を見た。ここ数ヶ月は締め切りが過ぎた案件を膨大に抱えていたり、書いたはずの原稿がすべてなくなっている夢などを見てばかりだったが、昨日は真理子が夢に出てきた。まだ豊が生まれる前、一番楽しそうにしていた頃、豊が生まれる前3人で散歩しようと言っていた近所の河川敷公園で篤人の手を引いてくれていた。互いに豊が生まれる前の呼び方をして、なぜかうまく足が運べない篤人に合わせてゆっくりと歩いている。そうだ、豊が今ちょっとわけあって……あ、俺今入院してて、などとあれこれ説明をしようとするのだが、何を話しかけても真理子は笑っているだけだった。

目覚めたとき、真理子はもういないのだという思いを改めて抱いたが、同時に確かに真理子がいた時間が自分の心に刻まれているとも強く感じていた。自分の周りの世界に少しだけ温もりが戻ってきたような、そんな穏やかな気持ちになる朝だった。

< 第 8 章 2人が暮らす家 >

翌日、佐伯は孝子の家を訪ね、豊の正式な預かりが決まった旨を伝えるとともに篤人から託されたぬいぐるみを届けた。豊は大喜びで早速自分のスペースへ持って行き、まだ陽は高かったのだが、孝子に布団を敷いてくれるよう頼み、ぬいぐるみを抱いてお昼寝の体勢に入った。

「やっぱり格別なのね、うちにいるぬいぐるみとは扱いが違うわ」

孝子は目を細めてそっと豊の部屋のドアを閉めた。来週からは保育園へ正式に戻るようになるし、楽しいことが続きそうではあったと礼を言った。

けれど佐伯はこれからがいよいよ本番となるとの思いでいた。万が一、篤人の側に問題が生じれば、想定しているより豊を預かる期間が長引くこともある。正直なところ心配事は多い、それらを解決していけるかは篤人自身の力に委ねられるところも多く、こちらの手が出せない部分もある。そこは篤人を信じつつ、可能な限り励ますしかないというところだ。

豊について孝子から、「バナナ祭りが始まったわよ」との話があった。何のことかと尋ねるとキッチンに招かれ、目に見えるだけで十房を超えるおびただしい数のバナナが存在する光景を「どう？ なかなかでしょ」という表情で披露された。

「試し行動であるらしいわね、一つのをとことん食べたいって要求することが。まあこっちでできることはとことんつきあって満足させることだと思うから、もういいって言うまで食べてもらってるわ。買い物に行くと、これだけ家にあっても必ずカゴに入れるしね」

「でも、バナナって傷みやすいんじゃないですか？ こんなにあつたら……」

「そこはいろいろ長持ちさせる方法があつてね、房にしとかないで一本ずつにするとか、あんな風にS字フックで吊るすとか」

指し示された方を見ればカーテンレールに2房ほどぶらさがっている。

「まあ、食べないうちに熟してきたら店でジュースやお菓子にしちゃえばいいんで特に問題はないわ。あと、黄色が多いと明るくてなんだか楽しい雰囲気になるのよね」

普通の家庭なら栄養バランスの心配とか、わがままを許さないとかいう捉え方でやめさせるほうに行くのだろう。しかし、知識としていつかは終わる行動だと見通しがついてることと、孝子の受け止める器の大きさもあいまって上手に対処してくれているという安心感を得て相談所へ戻った。

任意入院となつてから1ヶ月後、主治医との話し合いの結果で退院の日取りが決まった。体の調子の回復のおかげで、気持ちとしても以前より余裕のある状態になっていて、自宅での生活にさほど不安はなかつたが、紹介状をもらい、自宅近くのクリニックで服薬の管理は継続していくことになった。

仕事については最後に抱えていた締め切りを乗り切った後に入院となつたため、納期破りや納品不能ということにはならなかつたのが幸いだつた。一番長くつきあひのあつた発注元からのメールが何通も来ていたため、何の連絡もできなかつた謝罪の連絡を入れた後、事情を話し、しばらく休業する旨を伝えた。その際にはまた連絡をくれとってくれることが心に暖かく染みた。

この機会にと実家へ帰省し、簡単ないきさつの説明と、これからの万一の対応のことを兄に相談した。入院の保証人の書類だけを頼み、メンタル面の不調からほとんどまともな説明をしていなかった経緯を詫び、これからは定期的に連絡を入れると約束した。兄は篤人が「ありがとう」と何度も言うので、「お前にそんなこと言われたのはいつ以来か記憶ねえよ。ホントにもう大丈夫か？」と心配そうに尋ねてきた。「俺も人間ができてきたってことだよ」と応え、両親には詳しい話はせず、またいろいろと話をしたいと言って今度は豊を連れて帰って来てと言つて実家を後にした。

実家から自宅に戻ると、年賀状のやりとりを辛うじて続けていた以前の職場の上司に連絡を取った。フリーライターになつてからもたまに仕事を世話してもらっていた関係で、休業の旨を伝えるだけのつもりだつた。話を簡単に切り上げようとしたのだが「ちょっと、いや、かなり心配だ」と言われ、聞かれるままに細かな事情まで話したところ、時間を作るから出て来いとの話になつた。

会社近くの喫茶店で待ち合わせをし、あれこれと今までの経緯を話した。聞けば元上司の業界でもメンタル不調になつて休職・退職になる社員が多く、それに対応するための研修を受けたとのことで、社内では病気から復帰のプログラムについても成功した実績があるらしい。業務で関係のある社会復帰を支援をしている民間団体などの情報ももらい、社員と全く同じにはできないが、再就職の気持ちがあるならそのステップとして短時間のアルバイトの口があるとまで言ってくれた。感極まって涙声で礼を言っている様子は、何かと店員が見て見ぬふりをするほどだつたと会計後に聞かされ、笑い合った。こわばっていた心が動き出し、ずっと体中を覆っていたしびれるようなこわばりに暖かい血が再び通い、ほぐれてきているかのように感じた。

自分にも支えてくれる人とのつながりがあつた、でもそれが頭の中から抜け落ちていた。それを思い出せたのは今回の出来事があつたからで、一見すれば悲劇に見える日々にも見方を変えれば良い面も見出せてるのだ。そう思っている自分に確かな回復の手ごたえを抱いていた。

家の片付けは佐伯に紹介された家事援助サービスは使わず、自分の手でやることにした。

入院中にもう一度受けた岡本のカウンセリングで、あれこれ考えるよりも手を動かすことが思考の行き詰まりを防ぐこともあるとの助言をもらったので、不安な気持ちが出そうなときは淡々と整理を進めることにした。結果、次第に埋もれていた床面が見え始め、8割方はもとの空間を取り戻すことに成功した。

その最中、真理子に関するものが見つかった。郵便受けから出してきた記憶すらなかった国民健康保険の医療費通知。そこには別居してから自殺するまでの2ヶ月間にわたる、篤人も知らない受診歴が記載されていた。医療機関の名称から調べたところ、全てが真理子の故郷に所在地のある心療内科と薬局のものだった。いくつものクリニックの名前が並んでいる、最初にかかった際に望んでいた治療につながらなかったのだろうか。処方された薬が合わなかったのだろうか、まるで助けを求めて必死でさまよっていた足跡のように思えた。自分と同じように、いや、それ以上に深刻で治療が必要なほどの心の不調を抱えていたのか、と今になって知ることになった。

たった一人で、なんとかしよう、必死で治そうとしていたのだろうか姿を思い、自分が病院のベッドで不安に震えた夜と重なる。そこまでの考えが至らず、一人にしてしまった自分の無知に、篤人はむせび泣いた。

しかし、もう一つ見つかったものには救いがあった。無くしたと思ってあきらめていたデジカメが思いがけず発掘されたのだ。納められていたここ数年の画像は、涙で少しぼやけはしたが心を慰めてくれた。

「写りが悪い、ていうか撮り方が悪い。こんなの取っとかなくていい」

真理子がそう言ってプリントアウトしなかったものも多く残されていて、よそ行きではない、自分しか知らない真理子の日常が息づいていた。それは現実を受け止め始めた篤人の打ちひしがれた気持ちを、真理子が気遣ってくれているかのように感じられた。

「ということで、豊くんの家庭復帰に向けたプログラムを開始していい時期にあるかと思えます」

佐伯は安堵の気持ちを抑え、努めて落ち着いた声で篤人の家庭環境整備の進捗状況を児童相談所の定例会議で報告した。

一人でなすびにも顔を出すようになった篤人は、本人いわく「ついうっかり口をすべらせた」という孝子により、孝子こそが豊とともに生活している里親であることを知った。その後、具体的な家庭復帰に向けた準備についても細かな相談をしているとのことで、篤人をめぐる支援の柱はさらに太く多くなったといえる。児童相談所としてスケジュールの設定や管理、連絡調整などは今までと変わらず責任を持って行うが、児童相談所と篤人と孝子との間で取り決めたルールとして、児童相談所を通さずに調整できる事項も設定している。

里親による直接の親支援についてはまだ公にはなっていないが、所内では事後承諾的に試験的实施が認められている。もともと法律的に問題があるかという何もないため、所長も何も言えないというのが実態だろうか。気づいたときには既に外堀は埋められていたのである。この状況について何をどう細工したのか、河原は何も言わないが、そこに触れてもいいことはないような気がするので佐伯も余計な詮索はしていない。所長も定年までの短い時間をなるべく穏便に済ませたいだろうが、上司としてもう少しだけ頑張ってもらおうと河原の口調を心の中で真似てみたら、少し笑みが佐伯の顔に浮かんだのか、所長の横に座ってこちらを見ていた河原が「いいねえ」と言いたげにこちらより数段怪しい笑みを向けてきた。この人がいる限り、ちょっとじゃ済まないかなと所長の身を案じつつ会議に意識を集中した。

「ランドセルの注文開始準備は年々早くなっているのよ、早くしないと欲しいのが売り切れちゃうんだから」

家庭復帰プログラムの開始について相談に行った際、まだ9月だというのにランドセルのカタログを眺めている豊を不思議に思った佐伯は孝子からそう聞かされた。

「安田さんも多分知らないだろうから、今回の話にからめて教えてあげないとね」

タイミングとしては最初の試験外泊を行うころなら十分間に合いそうなので、購入は篤人に任せることになった。当日、店から「なんだか自分の常識では考えられない色を欲しいって言うんですが、大丈夫でしょうか」と孝子に電話をしてきたそう。それを聞いて佐伯は篤人の周囲との関係性の構築に手ごたえを感じた。

年末になり、里親会主催のクリスマスパーティーがなすびで開かれた。里親とその家庭の実子や預かっている子、まだ里親として子どもを預かっていない人などが集まる会で、篤人は実の親という他に類のない自らの立場ゆえに参加を気兼ねしたらしいが、孝子の押しに負け、トナカイの着ぐるみを着たりするなどして運営を手伝うこととなった。

「里親のお父さんはシャイな人が多くてね、誰にやってもらおうか悩んだのよ」

かく言う孝子の夫は問答無用にサンタ役を割り振られていた。佐伯も仕事とボランティアの要素が半々という立ち位置でなすび特製クリスマスメニューの調理員の一人としてそこにいた。メインディッシュは赤と緑のクリスマスカラーをイメージした大きなトマト鍋で、子どもたちが型ぬきを手伝った星型のじゃがいもやにんじんが浮かび、ブロッコリーは小さなツリーのよう、ソーセージで作られたトナカイやトマトの赤い帽子と衣装の間にとマッシュポテトで作った顔をはさんだサンタさんも美味しそう。シメはオムライスになるという子どもが喜ぶツボを抑えた孝子らしい一品だ。

篤人は以前の上司のアドバイスを受けながら就職活動をしているとのことだった。なか

なか簡単にはいかないらしいが、豊のためにもどういった働き方をするのがいいのかということを中心に考え、あせらず、無理のない形で動いていると話した。深刻そうな雰囲気を感じ取ったのか、富士子が傍にやってきた。

「大丈夫、どんなこともなんとかなるわよ。根拠はないけどね」

そう言って篤人がキープした磁器のカップにコーヒーを注ぐ。

「食べるのに困ったら2人でおいでなさい、ご飯とコーヒーくらいならおなか一杯ごちそうするわよ、お店と畑を手伝ってくればね」

現実味も少し含んだ冗談のような約束をして富士子はカウンターへ戻っていった。その後姿を見送って少し笑った篤人の表情は、ずいぶんと柔らかくなったたと佐伯は感じていた。

その日はそのまま豊は自宅へ外泊をすることになっており、篤人に手を引かれてプレゼントを抱えて帰って行った。2人を見送っていた佐伯に孝子が寄って来て声をかけた。

「どう？ このままいけそうかしら」

「ええ、大丈夫でしょうね」

児童相談所の職員としての自分が結論を出すのはもっと先になるだろうが、個人としての肌感覚ではそう思えた。

「よかった。で、佐伯さんは？」

「え？」

「来年もこの雰囲気の中に居てもいいって思えてる？」

「そうですね……」

孝子にグチを吐いたあの夜の自分と今の自分を比べるようにこの数ヶ月を思い起こす。自分の力だけで篤人と豊の暮らしが再構築できたなどという思いはない、いろんな人の力を集めたからできたことだ。でも、そのつなぎ役にはなれたと思うし、決められたことをこなすような通り一遍の仕事ではなく、自分なりの思いを込めて一味違う動き方できたようにも感じている。あの夜に抱えていた、周りがどうこうという気持は完全になくなったわけではないが、それよりも柱になる気持ができたような気がしていた。

決して平坦でも、穏やかでもない日々は続くだろう。けれど、入っている当りは少ないだろうが、年末のこの時期に多くの人が夢を抱いて破れる完全運まかせの宝くじよりは、自分の覚悟しだいでいい目には会えそうだと思う。

右足を後ろに引き、体ごと孝子に向き直って固まった意志を伝えるように宣言する。

「ご一緒させていただきます」

「よろしくね」

孝子の笑顔に佐伯の口元も少しゆるむ。こんな笑顔の連鎖がどこまでも続けばいいなという気持で星のきらめく冬空を見上げ、同じ空の下にいる、自分につらなる人たちの顔を思い浮かべた。来年は何か新年の目標を立ててみようか、ふとそんなことを思いついた。三日坊主で終わるかもしれないけれど、その三日だけでも前向きになれたなら、それは今までよりもきっと手ごたえのある日々になるだろうと思い、少し胸が熱くなるのを感じた。

その後、豊は順調に外泊実績を積み、年が明けてしばらく後には児童相談所から家庭復帰の予定日が提案された。早咲きの桜が色づく頃、そのスケジュール通りに豊は篤人の待つ家に戻った。

4月が迫る日、篤人は空虚さの薄まった部屋で真理子の思い出の品を豊と一緒にある程度整理した。篤人や豊では使えないものは処分しようとしていたのだが、孝子が「もしよかったら、うちの母が生地を使ってバッグを作ったりできるけど？」との申し出があったため、2着あったコートのリメイクしてもらった。もったいなくて使えないが、豊は自分用としてもらったものを保育園のかばんかけのところに一緒にかけて大事にしている。

決められずにいた真理子の納骨についても孝子の実家が檀家になっているお寺で永代供養墓に合祀してもらったことにした。真理子にとっても家族として暮らしたこの町が故郷になり、それを篤人と豊も共有していくことになればとの思いで区切りをつけた。

リビングの収納棚の中央部、先ごろ発掘されたデジカメの中にあつたスナップショットとともに納まった小さな仏壇（これまた孝子が一緒に選んでくれたものだ）に、毎日豊と一緒に手を合わせている。

ランドセルをその数日前から家でたびたび背負い、待ちわびた豊の入学式の日が来た。

孝子も地域の町内会役員として来賓席にいたことが篤人にとって心強く感じられた。

いろいろな子に声をかけている様子は里親というよりも地域の子を見守るご近所さんに見える。そうか、里親という関係ではなくなったが、これからも豊はご近所さんとして見守ってもらえるんだなという心強さを感じた。

孝子が一緒に選んでくれた篤人のものと同じようなデザインの豊のスーツ。孝子が豊を言葉巧みに乗せて、いろいろなポーズの写真を取ってくれた。篤人もぎこちないながら笑顔を作ったそのフレームの中に納まった。

自分の傍から離れて教室へ行き、上級生に連れられて会場である体育館に入場してきた豊の姿を見たとき、涙が流れた。ああ、また自分は泣くのだと思ったが、もうどう見られようともかまわないという気持ちが篤人を包んだ。波乱ともいえる日々を乗り越えても、自分の中でこれが変わったなどと胸をはれるものなどないが、閉じこもることで、閉じ込めることで何かを守ろうとすることはやめられたように思う。

この1年あまりの間、自分と豊をめぐる出来事については、この場にいるほとんどの人

は知らないのだから、涙の意味を知るのは自分だけだ。何もないままここに来ていたら、おそらく泣くことはなかつたろう。せめて心は何も着飾らず、ただこのままを受け入れようと、スーツの内側の胸ポケット潜めた真理子の写真に目を落とした。

ここにいない真理子の死を止められなかったという気持ちは残る。しかし、真理子と2人で、真理子と豊と3人で過ごした過ごした日々はこれからの篤人を支える柱となってこの胸にあり続けると信じられた。人は死ぬ、そのタイミングがどんなに早いと感じたとしても、それを後から遅らせることはできない。それならば、どうにもできないことを悔い続けることを真理子は望まないだろうと思えた。すまなかったな、と悔いて涙を流した数よりも、ありがとうな、と思い出を抱きしめることのほうが多くなっていけば、まぶたに浮かぶ真理子の顔は親子3人で最後に撮ったこの写真のような笑みを浮かべたものになっていくだろう、いや、そうしていくのだと篤人は心に決めていた。

再び顔を上げれば、他の多くの児童に混じっていても、びんと背筋が伸びた豊の後姿がはっきりとわかる。そこに豊もたくましくこの1年を乗り越え成長したのだと誇らしさを感じ、ぼやける視界を真理子の形見のハンカチでぬぐいながら、慈しむように見つめていた。

終